

42184

教科書文庫

4
810
42-1923
200030 2219

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

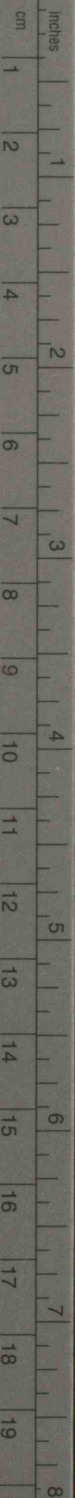


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
810
42-1923
2000302219

女子新國文 卷二



教科書文庫
4
810
42-1923
2000302219



伊勢神宮 (一鳥居)

資料室

3759
Ha 7

文部省檢定

高等女子學校國語科用 大正二十二年十二月二十四日



文學博士 芳賀矢一編

新國文

東京

合資會社 富山房發兌



女子新國文卷二

目次

一 星と花……………一

二 農家の春秋……………二

三 烏勸左衛門(自修文)……………九

四 蟲の聲……………一四

 露と蟲……………一四

五 鎌倉日記……………一八

六 菊は婦人の理想……………二五

七 遠足の後友の許へ……………二八

目次

一年十組 桐原和恵子

一年十組 桐原和恵子

一年十組 桐原和恵子

広島大学図書

2000302219



八 聖徳太子……………三三

九 蜘蛛の絲(自修文)……………三六

一〇 朝鮮雜觀その一……………四五

二 朝鮮雜觀その二……………五〇

三 八道の山……………五七

三 赤城山の大沼……………六一

 きのこの家……………

四 初雪……………六七

五 師走日記……………六九

六 紀州蜜柑……………七五

七 縁起の話(自修文)……………七九

八 百人一首物語……………八三

旅行に出でたらう
 のい、あつたつ、
 たいたう、(百連)

一九 新年……………八八

二〇 お日様の船出……………九一

二一 國歌と國旗……………九四

二二 伊勢神宮……………九七

二三 憲法發布……………一〇〇

二四 古代に於ける日鮮の關係(自修文)……………一〇四

二五 細川幽齋と太田道灌……………一〇八

二六 諏訪湖畔の冬……………一一三

二七 雪物語その一……………一二〇

二八 雪物語その二……………一二三

 雪の朝……………

二九 櫻花の短刀……………一二六

目次終

三〇 ロンドンだより……………一三三

三一 女帝ヴィクトリヤ……………一三七

三二 行儀作法……………一四一

三三 西洋の家庭(自修文)……………一四五

 樂しき家庭

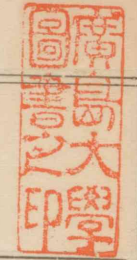
三四 北國の初春……………一五〇

三五 世界の春……………一五四

三六 雛の節供と摘草……………一五八

三七 犬ころ(自修文)……………一六〇

三八 月雪花……………一六五



女子新國文卷二

一 星と花

土井晚翠

おなじ「自然」の御母の

み手にそだちし姉妹、

み空の花を星といひ、

我が世の星を花といふ。

かれとこれとにへだたれど、

にほひはおなじ星と花。

星と花

毛附
毛上

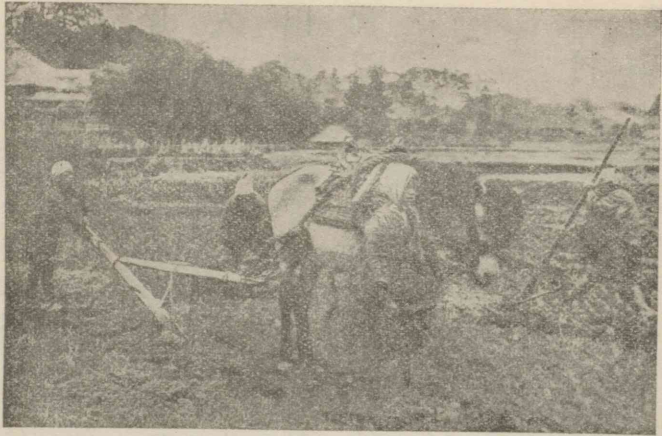
ゑみご光を宵々に、
 かはすもやさし、花ご星。
 さればあけぼの雲白く、
 み空の花のしほむごき、
 見よ白露のひごしづく、
 我が世の星に涙あり。

—天地有情—

二 農家の春秋

毛附、毛上といつて、農家の特に忙しい時が春と秋に二度ある。春は麥を刈取つて田を作る準備、秋は稻を取入れて麥を蒔くこしらへ。この兩度の時季が農家の骨折時である。

夏至



麥畠がまだじくじくして居る。しかし季節は待つてくれな

作

耕

六月に入るとだん／＼暑くな
 る。ねむさうな聲で蟬が鳴き始め
 る。苗代の苗が伸びる。麥の穂が赤
 らむ。かれこれするうち梅雨にな
 るから、それまでに麥を取入れな
 ければ腐らせてしまふ。二十一
 日は夏至で、その前後一週間程の
 うちに、田植もしなければならぬ。
 夜は短くなる。蚊が出て来る。農家
 のこの時分の忙しさ。雨上りには

疲れに疲れ
て
眩む

いから、小さい笠を被つて刈始める。雨上りの土が草鞋に附く。足は重い。鎌が切れなくなる。疲れに疲れて、眞晝には眼も眩むぐらゐである。都會の人はからころと下駄ばきで、團扇片手に暑くなつたと言つて居る頃である。麥はやうく刈入れた。一家の田地何十町歩あつても、この一週間のうちに田植をしまはねばならぬ。そこにもここにも勇ましい田植歌が聞える。明治天皇の御製に

つばめ飛ぶ影のみみえて田うるどき

家にひとなきをやま田のさと

二三日打通
しての

一村かくの如く賑はつて、二十五六日頃には一面の青田、青葉の山も晝のやうに映つて居る。これでまづ一安心と、二三

軋る

(一)幕末の女流歌
人太田垣蓮月
の詠

案山子



植 田

日打通しての毛附休。餅も搗き、御馳走もする。都會の人は狭く、るしい家の内で、電車の軋る音を聞いて、馬車馬や自動車の塵を吸つて居るのである。

小山田の霧の

中道ふみ分けて

ひと來と見しは

案山子なりけり

風が吹いても、雨が降つても、

案山子は田の中に立盡して居

稼穡
忙殺

上御一人

民草

(一)明治天皇御製

る。ふと見れば眞の農夫が立つて居るやうで、驚くものは鳥
獸ばかりではない。

農夫は實に案山子その者である。粗衣粗食で、年が年中田
畑に出て、稼穡の爲に忙殺せられて居る。二百十日の心配は
一通りではない。この頃はちやうど中稻ななだてが穂を出す時分で、
大風が一度吹かうものなら、それこそ夏中の辛苦艱難も皆
無になつてしまふのである。我が國は古來農の國である。心
配するのは農夫ばかりでない。恐多くも上御一人におかせ
られても、

照るにつけ曇るにつけて思ふかな
わが民草のうへはいかにと

小春日和

鋤く

と御心配遊ばされるのである。この恐しい二百十日、二百二
十日の厄日が過ぎると、やがて天氣も固まつて、九、十、十一と
三箇月は、秋晴玉の如き小春日和となる。稻はこの間に早稻、
中稻、晚稻おくだてと順々に實のつて行く。
取入が始ると、ここに又農家第二回の多忙な時節となる。
日は一日々々短くなる。早く取入れて又麥を蒔かねばなら
ぬ。その忙しさは田植時分の比でない。田植の仕事は、何とい
つても水仕事である。田を鋤いて水を入れ、これに稻の苗を
植ゑるのである。稻は水生植物であるから、少々雨が降つて
も、風が吹いても、田植が出来る。まして時候が時候だから、水
田の仕事は却つて心地がよいぐらゐである。

夜を日に繼ぐ

眼を擦り擦り

有明の月

山際

然るに稻刈の時は、刈つた稻を濡してはならぬ。雨の降らないうちと、夜を日に繼いで働く。つらいのは麥蒔で、十一月下旬から、十二月上旬にかけて蒔く。日が短いから、半分は夜業である。夜は十時、十一時頃まで野で働き、朝は又四時頃から起きて行く。やつと暖くなつた寢屋を捨てて、眼を擦り擦り出て行く。鎌のやうな有明の月が西の空に懸つて居る。まだ夜が明けない。鍬で土くれを打つと、刃が小石に中つて、はつしと火花が出ることもある。遠近に牛のうなり、馬のいななきが聞える。人聲もする。ここもかしこも麥蒔である。十六時頃日が出る。山際の雲が霽れて、東の空がうす明るくなつた頃の冷たさ。地の凍るのもこの時分である。堪へかね

夢路をたどる

(一)文學者。名は金之助。漱石はその號。漱石は京の人。大正五年十二月歿。
(二)漱石自身をさす。この文は自家の飼猫の書いたもの。書云々
縁側と平行
縁側から向つて正面の竹垣の長さは八九間、一周ひとめぐり。

て遠近に焚火するのも見える。

思ふに、農家一年の中、この季節ほど心せはしく、且苦しい時はあるまい。都の人々はまだあたゝかい夢路をたどつて、電車も通らなければ、牛乳配達の手も通らぬ時分、田舎は人みな目ざめて働いてゐるのである。我等が毎日口に入れる米や麥、たゞの一粒も容易に出來たものではない。

目修文

三 烏勘左衛門

(一) 夏 目 漱 石

主人の庭は竹垣を以て四角に仕切られて居る。縁側と平行して居る。一片は八九間もあらう。左右は雙方とも、四間に過ぎぬ。今吾が輩のいはゆる垣巡りなる運動は、この垣の上を落ちないやうに一週するのである。これはやり損ふことも間、あるが、首尾よ

く行くとお慰みになる。殊に處々に根を焼いた丸太が立つて居るから、ちよつと休息するにも便宜である。けふは出来がよかつたので、朝から晝までに三遍やつて見たが、やるたびにうまくなる。うまくなるたびに面白くなる。とうとう四遍繰返した。

ところが四遍目に、半分ほど巡りかけたら、隣の屋根から烏が三羽飛んで来て、一間ほど向ふに列を正してとまった。これは推參な奴だ。人の運動の妨をする。殊にこの烏だか籍もない分際で、人の堀へとまるといふ法があるものかと思つたから、通るんだ。おいのき給へ」と聲をかけた。真先の烏はこの方を見て、にやにや笑つて居る。次のは主人の庭を眺めて居る。三羽目のは、嘴を垣根の竹で拭いて居る。何か食べて来たに違ない。

吾が輩は返答を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上に立つて居た。烏は通稱を勘左衛門といふさうだが、なるほど

推參な奴
無禮なやつ。
籍もない分際
戸籍にもつて居らない身分
の何者だかわからない

通稱
普通にいふ名、とほり名。

勘左衛門だ。吾が輩がいくら待つても、挨拶もしなければ、飛びもしない。吾が輩は仕方がないから、そろそろ歩き出した。すると真先の勘左衛門がちよいと羽を廣げた。やつと吾が輩の威光に恐れて逃げるのかと思つたら、右向から左向に、姿勢をかへただけである。

地面の上ならその分に捨置くのではないが、如何せんたゞさへ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にして居る餘裕がない。といつて、また立留つて三羽が立退くのを待つのもいやだ。第一、さう待つて居ては、足が續かない。先方は羽のある身分であるから、こんな處へはとまりつけて居る。随つて、氣に入ればいつまでも逗留するだらう。こつちはこれで四遍目だ。たゞさへ大分疲れて居る。兎や綱渡にも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障害物がなくてさへ、落ちぬとは保證が出来ぬのに、こんな黒装

その分に云
云、そんな事さしてゆるしておいて、くのはない

逗留する
と、いま居る。たいざいする。

障害

東が三個も前途をさへぎつては、容易ならざる不都合だ。愈となれば、自ら運動を中止して、垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそさやう仕らうか。

敵は大勢ではあるし、殊には餘りこの邊に見馴れぬ人體である。嘴がおつに尖つて、何だか天狗の申し子のやうだ。どうせ質の良い奴でないには定まつて居る。退却が安全だらう。餘り深入をして、萬一落ちてもしたら、猶更耻辱だと思つて居ると、左向をした烏が「阿呆」といつた。次のも眞似をして「阿呆」といつた。最後の烏が御丁寧にも「阿呆、阿呆」と二聲叫んだ。いかに温厚な吾が輩でも、これは看過が出来ない。第一、自己の邸内で烏輩に侮辱されたにあつては、吾が輩の名前にかゝる。名前はまだないから、かゝりやうがなからうといふなら、體面にかゝる。決して退却は出来ない。諺にも烏合の衆といふから、三羽だつて存外弱いかも知れない。

人體

ひとがら。や

うす。

おつに

妙に。

天狗の申し

子。天狗に祈つて

生まれた子。

看過する

見のがす。そ

のまゝにして

おく。

烏輩に

烏ごときもの

に。

烏合の衆

きりつもなく

た。寄りあつ

た。多数の

もの。

進めるだけ進めと、度胸を据ゑて、のそ／＼歩き出す。烏は知らん顔をして、何か御互に話をして居るらしい。愈、癩癩にさはる。垣根の幅がもう五六寸もあつたら、ひどい目に逢はせてやるのだが、残念な事には、いくら怒つても、のそ／＼としかあるかれない。漸くのこと、先鋒を去ること約五六寸の距離まで来て、もう一息だと思ふと、勘左衛門は申し合はせたやうに、いきなり羽ばたきをして、一二尺飛上つた。その風が突然余の顔を吹いた時、はつと思つたら、つい踏みはずして、すとんと落ちた。

これはしくじつたと、垣根の下から見上げると、三羽とももとの處に止つて、上から嘴を揃へて、吾が輩の顔を見下して居る。圖太い奴だ。にらみつけてやつたが、一向きかない。脊を丸くして、少うなつたが、益だめだ。余が彼等に向つて示す怒の記號も、何等の反應を呈出しない。考へて見ると無理もない。吾が輩は今まで

反應
さいめのあつ
たしるし。

機を見るに敏あひのよしあしを早く見きはめるといふこと。
所詮とて。

彼等を猫として取扱つて居た。それが悪い。猫ならこのくらゐやれば、慥かに應へるのだが、あいにく相手は烏だ。機を見るに敏なる吾が輩は、所詮無益と見て取つたから、綺麗さつぱりと縁側へ引上げた。もう晩飯の時刻だ。運動も好きが、度を過すといかぬもので、全身が何となく緊りがない。ぐたくの感がある。加之まだ秋の取附で、運動中に照りつけられた毛衣は、西日を思ふ存分吸収したと見えて、ほてつてたまらない。——吾輩は猫である——

四 蟲の聲

沼波 瓊音

生存

私は一年の中で秋が一番好きだ。なぜ生きてゐるか。どういふ目的で生きてゐるか。と問はれれば、秋を味はふのが生存の一つの目的だ。と答へるぐらゐに、私は秋を好ましく思

荒ぶ
發心

風物

ふ。私が秋に對して感ずる心持はどうかといふに、荒立つた後に來る澄んだ心持である。悲しいとか、腹立たしいとか、感情が激しく動いた後に、非常に靜かな落着いた心持になる。その荒立つた感情の後に來る心持、それが秋の心持である。兵士が劇しい荒びた戦争に飽きて發心した心持にでも喩へようか。とにかく細かく、優しく、そして澄んだ感じである。かういふ心持は、秋の風物の何物にでも現れてゐる。物の形でいへば、日光、月光、雲、草花など、それ等のものにもこの心持は著しく現れてゐる。匂でいふと木の花、觸覺に感ずるものでは冷たい風、聽覺に來るものでは蟲の音、そのすべてに前に述べた秋の感じは現れてゐるが、殊に蟲の音に最も著

單調

しく現れてゐる。
● 耳に觸れるものでは、春はいろ／＼な小鳥が啼くし、夏の盛には蟬が鳴くけれども、蟬の聲は却つてうるさいものである。秋の蟲の音を聞く心持は、春のおぼろ夜に鳴く蛙の聲を聞く心持にも比べられるが、蛙の聲は卑俗で單調で、蟲の音ほど複雑な、優美な、そして細かな感じを起させない。その點に於て蟲の音は最優等で、前に述べた秋の感じなり味なりを一番深く表してゐる。小鳥の聲だとか、蟬の聲だとかは、外的とでもいふのか、外に現れるやうな趣を持つてゐるが、蟲の音は内的である。蟲の音を聞くと、心の眼が内に向つて開くやうな氣持がする。

季題

情趣

蟲の音は俳句では秋の季題になつてゐるが、實際は土用の中から鳴き始める。それもいい。秋に入つて月夜に鳴くのもいい。闇夜に鳴くのもよく、また聞きながら眠に入るのもよく、夜中にふと目覺めて聞くのも趣がある。朝早く聞く、晴れた日の晝間聞く、雨の降る日に聞く、それ／＼ちがつた情趣と味があつて、いづれもいい。殊に夜汽車にでも乗つて行くと、或淋しい驛に着いて、ふと蟲の音を聞くことがあるが、旅のあはれも一入覺えられて、深い味がある。また夜の銀座の明るい賑やかな通を歩いてゐて、ちよつと細い暗い路地に入ると、足許で蟲の音がしてゐる。趣が更に深い。それから秋毎晩蟲の音を聞いて、それが冬の初になつて、今まで蟲の

音に慣れてゐた耳に、全くなんの音も入らないのに氣づく
と、堪らなく寂寥を覺えるものである。 —しる椿—

露と蟲

相馬御風

露が散る。露が散る。

蟲が鳴く。蟲が鳴く。

月の光の照る庭に、

月の光の照る庭に、

きら／＼／＼／＼と露が散る。

きら／＼／＼／＼と蟲が鳴く。

さや／＼揺れる葉蔭では、

さや／＼揺れる葉末から、

露の散るのがうれしいか、

蟲の鳴くのがうれしいか、

ころ／＼／＼／＼と蟲が鳴く。

きら／＼／＼／＼と露が散る。

五 鎌倉日記^(一)

吉井勇

(一) 神奈川県西南五里、横濱の治承四年、源頼朝の幕府を開設し、古蹟多し。

×月×日

黎明、まだ太陽の昇らぬ前に、殆ど一月ぶりて海岸に出た、もう秋の氣が砂にまで染みこんで、踏めば響を立てさうである。思はぬ悪辣な病氣の爲に、二十日あまりを病床で過した身には、曉の風が冬のやうに冷たく薄情に私の肌を吹いて行く。雨もよひの曇つた空には、鼠色の雲が煙のやうに飛んで、日の出前の銀のやうな光が空の底によどんである。海はまだ全く夜の眠から覺めないやうな様子で、暗い藍色の水の面からは、水蒸氣がものうく立ちのぼつてゐる。しかしもう小魚とりの小舟が七八隻、渚から餘り遠くない處に出てゐて、綱を手繰る人影などがよく見える。

黎明

悪辣

雨もよひ

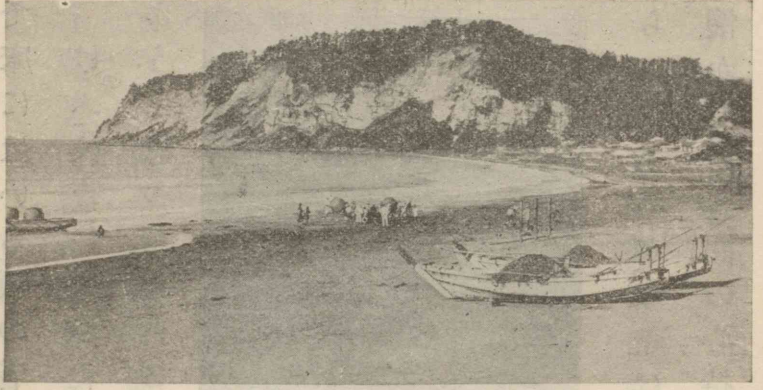
よどむ

〔一〕由比濱にそ、
ぐ小流。

僅か一月見ない間に、海岸の光景はまるで變つてしまつた。あんなに立並んでゐた脱衣所の藁小屋は、今はもう影も形もなくなつて、處々に焚火の跡などが寂しく残つてゐるばかりである。避暑の人々はもうみんな歸つてしまつたと見えて、一月前の賑はしきは、もうどこにも見る事が出来ない。よく美しい人たちが徒歩をしてゐた稻瀬川の海の入口では、鴉が死魚の骸を争つてゐる。

海濱の砂山の下で、海藻を焼いてゐる煙の匂が、むせるやうに私の方に流れて來たので、すぐに引返して、家に歸つた。漁師の家の間を通り抜けると、井戸に臨んで青無花果あをいちじくのなつてゐるのが、私の目に快く映つた。いつの間にか霧のやう

もどかし
はかなし



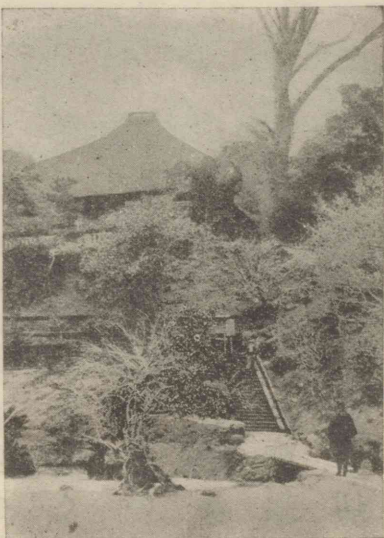
鎌倉海岸由比濱

な雨が音もなく降つて來た。朝暫く降つて霽れた雨が、夕方からまた降出して來た。けふは一日寂しくつて堪らないので、手紙ばかり書いてゐた。私が鎌倉に來てからの樂みは、たゞ手紙ばかりなのである。朝起きてから夜寝るまで、手紙ばかり切に待たれて、郵便脚夫の來る時を、もどかしく待暮してゐると、何だか自分が急に不幸な境遇にでもなつたやうな氣がして、はかない心持

(一)鎌倉町の西南部。長谷寺の観音を以て名高し。

無聊

で床にはいる。浪の音さへもの寂しい。けふは夜になつたら郵便を出しに長谷の方へいつて見ようと思つてゐたのに、雨が降出したので、止めてしまつた。



長谷寺

無聊に堪兼ねてゐたところへ、ちやうど客があつたので、十時過まで雑談をして、やつと寂寞を紛すことが出来た。去年ここへ来た時分には、この寂寞に慰められ、懐かしい。人間の心持といふものは、どうしてこんなに變る

のだらうか。

御詠歌

(一)鎌倉権五郎景政をまつれる社。長谷寺の西方約一町。

避暑地の街は更けるのが早く、どこかの御詠歌の聲が聞えて、雨はしめやかに降つてゐる。

権五郎神社の裏山では、蟬がものうく鳴き始めた。仕事に飽きて横になつてゐると、いろいろの事が思ひ出されて、取留のない空想の中に私の心は誘はれて行く。病院にはいつてゐた時分の癖がまだ抜けず、懶惰な日ばかり送るやうになつた。朝から晩まで一字も書かずに、一日杌の前に坐つたまゝで茫然と暮す時が多い。倦怠は實に苦痛である。私は最も倦怠を怖れてゐる。

空はいつか荒模様になつて、浪の音が高く轟き始めた。

堂宇

蕭條

(一)鎌倉町字極樂寺にあり、眞言宗にして、眞文永六年の創建
(二)鎌倉町の西南海岸

思ふと、雨が烈しく降出して來た。私は急に蘇つたやうな心持になつて、立つて窓から外を眺めた。長谷の觀音の堂宇の屋根が、山の半腹の繁つた樹の間から、寂びた形を現してゐる。その傍に聳えてゐる公孫樹は、まだ黄葉はしないけれど、雨に濡れて立つたところは、どうしても蕭條たる秋の姿だ。私はもう鎌倉の秋に堪へない。
午後になつて雨が霽れたので、極樂寺から稻村が崎の方へ行つて見た。雨後の海は銀灰色に光つて、まだ雨を催してゐる鼠色の雲が、低く空を飛んでゐる。岬の所で碎ける浪が、白く輝いて散つてしまふと、またその後から同じやうに高い浪が押寄せて來る。

往來で一人の漁師の子供が鰻うなぎを下げて來るのに出會つた。
——河霧——

六 菊は婦人の理想

棚橋 絢子

菊の花の歌に詠まれ、詩に作られ、文章に書かれ、插花とせられ、花壇に植ゑられ、或は繪畫として、或は衣服の模様として、種々の裝飾と娛樂に供せられるのは、古よりの事でありまして、永い歲月にわたつての培養の結果は、殆ど理想的の花になり、これを人間に喩へますれば、模範的婦人の標本であらうと思ひます。これが比を古人に求めますれば、辛うじて紫式部ぐらゐるがこれに當らうかと思ひます。

標本
比を古人に
求む

千姿萬態

馥郁

天地間の美は多く花に集り、花の美観は千姿萬態ではあるが、未だ菊の花のやうに色彩が豊富で、香氣が馥郁として、風姿が高尙優美で、花壽の長久なものはありますまい。私は植物學者ではありませんが、未だ菊のやうに紅白濃淡、さまざまの清い美しい色のあるものを見ません。また菊のやうに嗅感を痛めない、程のよい清香をわたしたちに送るものもあるまいと思ひます。しかも風姿が優婉で、高ぶらず、僻まぬのが、やがて皇室の御紋所となつて、竹の園生に影を現す所以であらうと思ひます。ダリヤなども、美しいには相違ありませんが、その姿からして、到底菊に及ぶことは出来ませんまい。

優婉

竹の園生

Dahlia.

腰折

それから菊は本末が直く、ゆがみ曲ることを忌むものがあります。さうして菊ほど柔順で、素直なものはありません。人間の培養によつて、いかやうともなります。大きな輪の菊でも、構はないと小さくなりますが、又反對に、小さな輪の菊でも、育方によつては、随分大きくなります。菊は此の如く、婦人の特性、殊に柔順の徳を表したものと存じます。婦人はもとより素直で柔順でなければならぬのであります。私のこの頃の腰折に、

こし折らぬ人のまことの菊の花

もと未なほく思ひたちけり

又菊の造りやうによつていかやうにもなることは、育兒

上大いに鑑ねばならぬことと存じます。

—女らしく—

七 遠足の後友の許へ

すみ子さんお愛もさいますせんか。お尚私の
学校では秋季の遠足會がありまして本牧岬へ
参りました。横濱の原さんとよお方の區別症で
ゆりゆりおぼせました。たが後山へ
海城に面白い所で知らぬ間にかりの時間の
来て残念に思ひました。ちへ歸つたのは五時

本牧岬は横濱
市の東南方海
中に突出す。

目黒不動寺、寺
名は龍泉寺、寺
東京の郊外日
黒村。

(覺え)

高野山は京都の
郊外野山に
ある。

祇園は官幣大
社の八坂下
清水町、京都
清水、清水、
東清水、清水
清水の建上、
水寺あり。

かしこでしたすみ子さん去年のちやうど今日
みんな目黒の不動さんへ遠足に連れ行つて
来た。おぼせましたねあの時は小さい紅葉の本を
大事に持つて歸つてお庭に植ゑたのを覚えて
いらつしやいませう。今年は西東に別れましたが
この秋は定めて高野山の紅葉見にもいらつしや
うぞうございませう。その節はどうかお様子をさ
らせ下さいませ。先達の口紙に祇園や清水の事が
書いておりました。たが私も一応は行つて見たいと
思ひます。うなづかます。松田さん、河原さん、お丈夫で

(別封)

毎日の一緒に通つていつかやいませりあもよう
 一、夜あなたと西一緒に遠足に行つて見たいと
 思ひます本牧でも皆さうやしてあなただの西へが
 随分おもしろい別あは記念の繪葉書で西へい
 ます右の方に見える家のあたりが私昔の遊んだ
 所で西へいますどうかおからだを西へ大切に扱は
 しくお祈り西へ紙を下さいませさやうなうら

成文法

(一)用明天皇の長子推古天皇の二十九年(西暦六四五年)
 (二)第三十一代(西暦六四五年)
 (三)第三十三代(西暦六四五年)
 輔佐す

非凡な天資

八 聖徳太子

萩野由之

政治家としては、新に大陸文明を輸入して大化改新の基
 を作り、宗教家としては、佛教を奨励して各宗から太子様と
 尊ばれ、法律家としては、成文法の始といはれる十七條の憲
 法を制定し、而して又工藝家からはその技術の開祖の如く
 尊敬せられ、あらゆる方面にその道々の元祖の如く仰がれ
 るのは、^(一)厩戸皇子である。

皇子は用明天皇の御子で、^(二)推古天皇の御時に皇太子とし
 て攝政をなされ、天皇を輔佐し奉つて、政治上、宗教上、工藝上
 文學上、種々偉大な功績を遺されたお方であるが、御幼少の
 時から非凡な天資は顯れてゐた。皇子御幼少の時、或日父の

皇子即ち後の用明天皇は、王妃と共に皇子を伴なうて、宮中の御庭に今を盛と咲いてゐる桃の花を御覽なされたことがあつた。その時、父君は御子の智慧を試して見ようと思し召されて、

「そなたはこの桃の花の紅を美しいと思ひますか、又はこの松の葉の緑を美しいと思ひますか。」とお尋ねになつた。すると皇子は、

「桃の花は美しうございますが、それはたゞ一時の事です。松の緑は四季に色が變りませんが、私はこの桃の花よりは、あの松の色を愛します。」

と即座にお答へ遊ばされたから、さすがの父君も大いに驚

即座に



聖徳太子

(西來寺藏 日本國寶全集所載)

寵愛

障害

故障を排す

いて、一層御寵愛遊ばされた。

このお答は、幼年のお方としては珍しいお考であるが、成



聖徳太子七歳の木像
(大和法隆寺所藏)

長の後、諸の政治上の改革に就いては、いろいろの障害も起つたであらうに、いつもそれに打勝つて事を成遂げられたその勇氣と

志操は、この松の緑の四季にその色が變らず、霜や雪の故障を排して常磐木の操を立てるのと相似てゐるではないか。

桃の花のやうに、一時にぱつと美しうはでな事をして、未の遂げぬ時には、大改革も大事業も成功するものではない。桃と松のお答は吾人の好い教訓である。

又或時皇子は他の諸皇子と一緒に、お庭先で遊んでいらせられたが、何かの事の間違から、激しく口論に及んで、大分騒々しくなつた。これを聞かせられた父君は、懲しめの爲にとあつて、鞭を取つて御縁先までお出でになつた。

すると他の方々は、皆鞭にうたれるのが恐しさに、我先に逃げかくれられたが、たゞこの皇子だけは、少しも逃げかくれられぬのみか、父君の御前に出て、平身低頭していらせられた。そこで父君は怪しみながら、

平身低頭

「そなたはなぜ逃げぬのか。」

とおたづねになると、皇子は恭しく一禮して、

「逃げましたところで、天へも昇られず、地の中へもはいられませぬ。それよりは正直にお鞭を受けたいと思ひまして、ここにゐるのでございます。」

と申し上げられたので、父君は却つて、皇子の正直をお褒めになつたといふことである。

この正直の心がけが、四季變らぬ松の緑のやうに、皇子一生の本領となつて、いつも御事蹟にあらはれてゐる。それ故、皇子のお定めになつた十七條の憲法の中にも、正直といふこと、平和といふことなどが重に諭されてある。平和は正直

本領

光彩を放つ

から起るので、正直はまた成功の基であるからである。皇子の御事業は種々の方面に光彩を放つてゐるが、かゝる大人物の幼時には、かくの如き事があつたのである。大人物となるには、幼少からの修養が最も大切である。

— 讀史の趣味 —

自修文

九 蜘蛛の絲

芥川龍之介^(一)

^(一)文學士。小説家。東京の人。

或日の事でございます。お釋迦様は極樂の蓮池の縁を、獨りてぶら／＼お歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞白で、その眞中にある金色の薬からは、何とも言へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居

^(一)地獄へ赴く途に在るといふ。瀬川、また三つ瀬川、渡河などともいふ。
^(二)地獄に在る。生前惡業を行つた者この山に追上げられるといふ。
うごめく、蟲などの動くやうに、うよする。

りました。

極樂はちやうど朝でございます。やがてお釋迦様はその池の縁におたゞずみになつて、水の面を蔽つてゐる蓮の間から、ふと下の様子を御覽になりました。この極樂の蓮池の下は、ちやうど地獄の底に當つて居りますから、水晶のやうな水を透徹して、三途の川や針の山の景色が、まるで視眼鏡を見るやうにはつきりと見えるのでございます。すると、その地獄の底に犍陀多といふ男が一人、外の罪人と一緒になつてゐる姿が、お眼に止りました。この犍陀多といふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろ／＼惡事を働いた大どろばうでございますが、それでもたつた一つ善い事をした覺がございまして、申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたをはつて行くのが見えました。

そこで犍陀多は早速足を舉げて、踏殺さうと致しましたが、「いや、これも小さいながら、命のあるものだ。その命をむやみにとるといふ事は、いくら何でもかはいさうだ」と、かう急に思ひ返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに、助けてやりました。

お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのを思ひ出しになりました。さうして、それだけの善い事をした報には、出来るならこの男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ側を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の絲をかけて居りました。お釋迦様はその蜘蛛の絲をそつとお手にお取りになりました。さうして、それを玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へまつすぐにおおろしなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に浮いたり沈んだりしてゐる犍陀多でございます。何しろ、どちらを見ても眞暗で、たまにその暗闇からぼんやり浮上つてゐるものがあると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さと言つたらございませぬ。その上、あたりは墓の中のやうにしんと静まり返つてゐて、たまに聞えるものと言つては、たゞ罪人がつく微な溜息ばかりでございます。

これは、ここへ落ちて來るほどの人間は、もうさまゝな地獄の責苦に疲れはてて、泣聲を出す力さへなくなつてゐるのでございまして。ですから、さすが大どろぼうの犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、たゞもがいてばかり居りました。

ところが或時の事でございます。何氣なく犍陀多が頭を擧げて、血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした闇の中を、遠い遠い天の上から、銀色の蜘蛛の絲が、まるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一すぢ細く光りながら、する／＼と自分の上へ垂れて参るては、ございませぬか。犍陀多はこれを見ると、思はず手を拍つて喜びました。この絲にすがりついて、どこまでものぼつて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございませぬ。いや、うまく行くと、極樂へはいる事さへも出来ませう。さうすれば、針の山へ追上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもある筈は、ございませぬ。かう思ひましたから、犍陀多は、早速その蜘蛛の絲を両手でしつかりとつかみながら、一所懸命いっしょけんめいに上へ上へと、たぐりのぼり始めました。元より大どろぼうのことでございませぬから、かういふ事には、昔から慣れきつてゐるのでご

ざいます。

しかし地獄と極樂の間は、何萬里となく隔つてゐるものですから、いくらあせつて見たところ、容易に上へは出られません。稍暫くのぼる中に、とう／＼犍陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へは、のぼれなくなつてしまひました。そこで、仕方がございませぬから、まづ一休み休むつもりで、絲の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見下しました。すると、一所懸命いっしょけんめいにのぼつたかひがあつて、さつきまで自分がゐた血の池は、今ではもういつの間にか、闇の底にかくれて居りました。それから、あのぼんやり光つてゐた恐しい針の山も、足の下になつてしまひました。この分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れませぬ。

犍陀多は両手を蜘蛛の絲にからみながら、ここへ來てから何

年にも出した事のない聲で、「しめた。しめた。」と笑ひました。ところが、ふと氣がつかますと、蜘蛛の絲の下の方には、數限りもない罪人たちが、自分の昇つた後を附けて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ上へと一心に攀ぢのぼつて來るではございませんか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、暫くは唯ばかりのやうに大きな口を開いたまゝ、眼ばかり動かして居りました。自分一人でさへきれさうなこの細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へることが出來ませう。萬一途中できれたといたしましたら、せつかくここまでのぼつて來たこの肝腎な自分までも、もとの地獄へ逆落しに落ちてしまはなければなりません。そんなことがあつたら、大變でございます。が、さういふうちにも、罪人たちは何百となく、何千となく、眞暗な血の池の底からうよ／＼とはひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛

の絲を、一列になりながら、せつせと昇つて參ります。今のうちにどうかしなければ、絲は眞中からきれて落ちてしまふにちがひありません。そこで犍陀多は大きな聲を出して、
「こら罪人ども、この蜘蛛の絲はおれのものだぞ。お前たちは一體誰の許を受けて昇つて來た。下りろ。」と喚きました。
その途端でございます。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が、急に犍陀多のぶら下つてゐる所から、ぷつりと音を立ててきれました。ですから犍陀多もたまりません。あつといふ間もなく、風を切つて、獨樂のやうにくる／＼まはりながら、見る／＼中に闇の底へ、眞逆様に落ちてしまひました。後にはたゞ極樂の蜘蛛の絲が、きら／＼細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れてゐるばかりでございます。

三

一部始終
始り終まで
のこらす。

お釋迦様は極樂の蓮池の縁に立つて、この一部始終を、じつと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顔をなさりながら、又ぶら／＼お歩きになり始めました。

自分ばかり地獄からぬけ出さうとする犍陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當な罰を受けて、もとの地獄へ落ちてしまつたのが、お釋迦様のお目から見ると、あさましく思ひ召されたのでございませう。しかし極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着いたしません。その玉のやうな白い花は、お釋迦様のおみ足のまはりに、ゆら／＼と萼を動かして居ります。そのたんびに、眞中にある金色の薬からは、何ともいへない佳い匂が、絶間なくあたりに溢れ出ます。

極樂ももうおひるに近くなりました。

— 傀儡師 —

一〇 朝鮮雜觀 その一

Christians
教育家兼宗教
家、西暦一八
四三年生、明
治の初年日本
御雇教師た



人老るれ乗に驢

「ミカドの帝國」を書いたアメリカ人グリフィスは、朝鮮を「仙人國」と呼んだ。この仙人國も今は我が大日本の新領土となつて、一千餘萬の仙人も、皆我が新しい同胞である。仙人も段々俗人の仲間入をして、活動してもらはなければならなくなつたが、黒い冠を被り、白い衣を着て、悠然として市街を歩いて居る朝鮮紳士の風采を望めば、いかにも仙人らしい様子が今でも見える。人毎に長い煙管を携へて

優長

居るのは、仙人にはふさはしからぬやうに思はれるが、この長い煙管そのものが、優長といふ感を一層強からしめるのである。

貴賤上下悉く純白な着物を纏うて、見渡す限り眞白なのは、全世界中恐らくは朝鮮ばかりであらう。夏だからさうなのではなく、冬でもやはり同じである。これには一つの傳説があつて、昔或時代の王様が、父王の死を悲しんで、始終白い服をつけて居られたので、人民が皆これに倣つたのだといふ。一應聞けば尤もらしい殊勝な話であるが、この傳説は無論作事であらうと思ふ。どこの國でも、古い時代には眞白な着物が流行るが、そのうちに色々の染色や、縞や、飛白の衣裳

殊勝

萬事萬端
崇拜す

が行はれる。文化の他の方面が種々に變化を受けたにも拘らず、純白の衣服が數千年の後までも行はれて居るのは、實に不思議といはねばならぬ。萬事萬端支那を崇拜した國として、この國俗を變へなかつたことも、考へれば面白いことである。

子供は折々桃色や、萌黄や、藍色の着物を着て居る。それも全部同じ色で、日本の娘の子のやうに、美しい花紅葉の染模様

ではない。婦人も間々紅色、萌黄色の衣を着けて居るが、模様や縞は少しもない。殊に婦人が「長衣」といつて、我がかつぎの



女るた着を衣長

繪卷物

やうなものを着て、目ばかり出して歩いて居るのは、日本の古代の風俗そのまゝで、服制に多少の相違こそあれ、大體に於て古い繪卷物を見るやうな心地がする。低い屋根の下でまくは瓜などを食べて居る様子は、どこことなく今昔物語をまのあたりに見るやうである。現在の生活に於て、朝鮮人が優長といふばかりではなく、朝鮮の歴史そのものが優長で、今でもやはりそろ／＼と、昔の歴史が流れて行くのではないかと思はれる。

衣冠を正しくすることは、慥かに朝鮮人の一美風であるかとも思ふ。どんな卑賤な人でも、めつたに肌を露すことはない。これは寒い氣候の關係から、自然習慣となつた所以も

衣冠を正しくす



朝鮮人の貴風俗

あるかも知れぬが、とにかく素肌を人前には出さない。支那の労働者も身體の上部こそあらはせ、腰から下は出さないが、朝鮮人で肌を脱いで居るのは、終に一人も見なかつた。

朝鮮人は雨具を用ひぬといふことは豫て聞いて居つた。今は田舎でも蝙蝠傘を手にして歩

いて居る人を見受ける。それよりも不思議に感じたのは、雨降の時に、冠の上に小さな傘を載せて居る事である。竹の骨

雲水

(Turkey.
(土耳其)

(Silk-hat.
(絹帽)

に油紙を張つた物である。成程日本の傘はこれを大きくしたものだ。なと感服した。又頭に雲水の被るやうな深笠の大きいのを被つて歩いて居るのが往々ある。あれは何かと聞けば、喪中の人で、喪中は一年、二年、三年必ず常にあの笠を着けて居るといふ。いかさま古い禮儀はやかましい處だ。朝鮮、支那、トルコ皆それぐの被物を今も保存して居る。日本人は古い物を保存して居るが、新しい物は何でも用ひる。洋服に下駄も履き、紋附の羽織にシルクハットも被る。

一一 朝鮮雜觀 その二

朝鮮人の物を運ぶのは、男は背、女は頭である。男の背には



例の支繫ちけいといふ物を掛けて、一切の物をそれで運ぶ。八百屋が唐茄子や胡瓜を賣るのにも背に負うて來るので、日本のやうに、天秤棒で両端に擔ぐことはない。すべてが山に柴刈ちぎに行く昔話の爺さん式である。女は洗濯物でも何でも頭に載せて行くので、これは京都の大原女式である。しかし大原女のやうに張板や梯子などを頭に載せて歩くのは、見受けなかつた。朝鮮には虎が居る。竹に虎といふから、竹も澤山ありさうに思はれるが、實際は少い。これは氣候のせいである。竹の簾

や、扇子や、竹細工もいくらかあるにはあるが、概して日本のやうに竹を種々の工業には使つて居らぬ。南の新領土臺灣は竹の名所で、唐竹真二つ割で天秤棒の代りにしたり、竹で船を作つたりして居るが、京城では竹竿一つ見附からぬ。洗濯物を干してあるのを見ると、大抵繩にかけ渡してある。又田舎などでは、丘の上にひろげて並べてあるだけである。桶たものやうなものにも、竹のたがはない。竹のない所へ行くと、今更のやうに竹の効用の廣いのに驚かれる。水道栓の側で水を酌んで居る朝鮮人を見ると、ブリキの石油の空函などを用ひて居る者もあるが、瓢箪をたち割つたのが水を酌む杓子であるのは、古風で面白い。

朝鮮人の履物はきものは、男も女も一種の靴であつて、内地のやうな下駄、足駄は見當らぬ。靴の下に足駄の齒のついたものはあるが、鼻緒を立てて、その鼻緒を足の指に挟んで歩くといふ藝當は、日本人より外には出來ぬのであらう。朝鮮の家はいかにも低くて、むさくるしく見える。京城にはさすがに瓦葺の家もあるが、田舎は殆ど藁屋わらやばかり。その藁の葺方が、日本の如く綺麗に端をそいでないので、たゞ藁を打掛けたや



朝鮮人の町

庶民

うに見える。寒さを恐れる爲窓が少いから陰氣で、日本の田舎家のやうにからりとして居らぬ。日本のは小さくても、汚くても、からりとおつ開いて居る。あれでは夏はさぞ暑からうといへば、日が透らぬから割合に涼しいとのこと。床は土で、その下が温突どんどで、冬は火を焚いて暖めるのである。元來朝鮮では、庶民には二階建、三階建を禁じたのである。それ故庶民の家は皆低い。又家を餘り立派にすれば、金持と認められてすぐに課税せられるから、金持でもわざと外觀を汚くして居たやうな原因もあらう。併合後新築する朝鮮人の家には、段々と二階造の高いのも出来るさうである。

それに比べれば、王宮は比較にならぬほど規模も大きい

(一)朝鮮李太王生稱父李昪應の尊

膏血を絞る



し、立派である。就中さきの王宮景福宮は大院君の造營せられた宮殿で、幾多の宮殿樓閣が相

連つて、廣いものである。これを造る爲には、民の疾苦をも顧ず、人頭税までも課して作り上げたといふ。いはゆる民の膏血を絞つて築いたので、この宮殿が即ち李朝に崇つたのだといはれて居る。

現王宮昌德宮も拜觀したが、これは近世の洋風に塗替へ、西

Boia.

丹碧を塗る

林泉の美

洋の椅子、ソ^(一)ーファなどがあつて、面目が改つて居る。しかし總じて建築には丹碧を塗附けてあるばかりで、材木の削方、仕上方は、日本のやうに立派でない。一體樹木の少い京城に、昌徳宮の裏の秘苑だけは、さすがに老樹が生茂つて居る。しかし何等林泉の美とてはない。小さい溪流の石に題した句に、「飛流三百尺。遙落九天來。」とあるのには驚いた。

朝鮮人は怠惰で労働を嫌ふといふが、農業に精を出して働いて居るのを見ても、決して懶るばかりの人間ではない。朝鮮の山を禿山にしたのも、長煙管をくはへて悠然として南山を見て居る白衣の民を作つたのも、皆古來の惡政の罪である。

(一)苛政猛於虎。(禮記)

苛政^(一)は眞に虎よりも猛である。我が一千万の新同胞は、今や仙人の生活を次第にはなれて、嬉々として我が聖天子の德澤に霑ひつゝあるのである。

明治天皇御製 をさめしる國のはてまでしらせばや

民やすかれとおもふこゝろを

一一一 八道の山 大町 桂 月

(二) 八道の山よいざさらば、

年のなゝさせ戈執りて、

踏みあらしたる日の本の

ますらをは今歸るなり。

(一) 朝鮮八道、即ち京畿道、江原道、黃海道、忠清道、全羅道、慶尚道、咸鏡道、平安道。

(一)朝鮮慶尙南道の東南角。我國との交通する最も大切な處。

夕間暮

知遇

(二)支那のこと。

(三)豊臣秀吉。

釜山(一)の浦の秋ふけて、

空もしぐれの夕間暮、

波路遙かに帆を揚げて

汝と今や別るなり。

知遇の恩に身を捨てて、

四百餘州を我が駒の

蹄に蹴んご勇みしも、

覺めてはかなき夢なれや。

われを知りにし太閤(三)の

世になき後は誰が爲に、

千里の外に戈執りて、

異境の山

(一)石田三成。吉の臣。慶長五年(一六二六)關原の戦ひに討たれり。○(二)小西行長。吉の臣。三成に敗れて殺さる。

異境の山にいくさせん。

耻をしのびて故郷に、

歸るも後に死なん爲。

主君の家の行末を、

思へば重き命なり。

あはれ太閤世を去りて、

よつぎの主は幼し。

石田(一)、小西(二)の小人ばら、

かならず事を誤らん。

我が幼時よりはぐくまれ

恵に浴みし豊臣の

家を護りて死なん身の、
永くは住まじ世の中に。

あごに見捨つるますらをの

亡魂若しも知るあらば、

三途の川や六道の

辻にしばらく我を待て。

これを限りの見納に、

今ひと度ご見返れば、

波音すこく雨荒れて、

野山は霧におぼろなり。

八道の山よいざさらば、

國の譽ごたゝかひて、

花ご散りにし日の本の

男子の骨を護れよや。

—黄菊白菊—

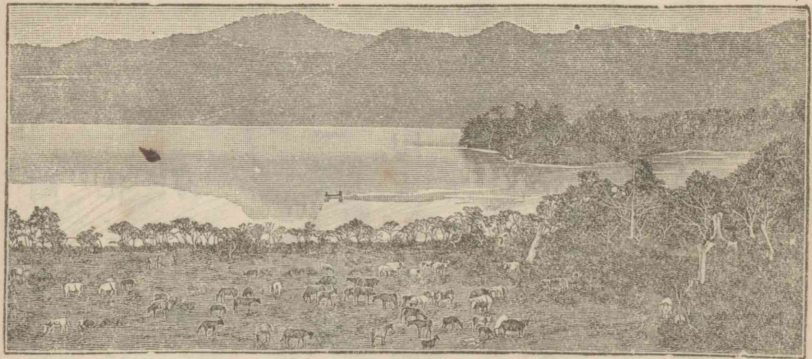
一三 赤城山の大沼

吉江孤雁

(一)上野國利根勢
多二郡に跨り
る。榛名、妙義
と合はせて上
野の三山と稱
せらる。

赤城山上一泓(一)の明鏡、寂然として四圍の樹影を映して居
る森嚴な大沼の水。

夜が明けはなれると、夜中の霧は沼の面をはつて林を傳
ひ、山上へ逃上つて行く。窓を開けて見ると、山影が水に沈ん
で、水は深碧。沼の西方にやゝ高く見えるのが五輪峠で、續い
て右手に高く聳えてゐるのが大沼を繞る外輪山中の最高

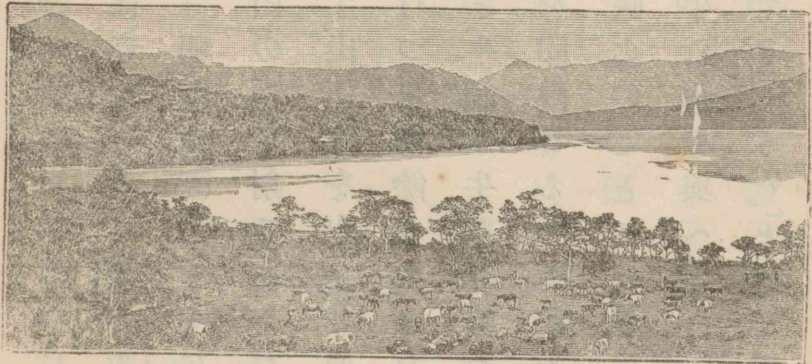


赤城山の大沼

峰黒檜山である。

朝風が静かに吹いて來ると、白い靄が大方晴渡つて、五輪峠の裾が沼近く迫る處、檜の林があつて、青草が沼の縁に沿うて、美しく敷かれてゐる。見るとその檜林の中から、二三頭の牛が水邊まで出て來る。仔牛もその後から現れて來て、水邊を狂ひ廻る。

「もう」と聲高く一頭の牛が吼える
と、またどこかで「もう」と應ずる。それ



の放牧

を合圖にか、幾十の牛が續々水邊へ集つて來て、頭を垂れ尾を振つて青草を噛んでゐるが、やがてその中の一頭が、戯に狂ひはじめると、すべての牛が忽ち狂奔し出して、みんな散り散りになつて、林の中に影を没してしまふ。

牛の影が見えなくなつてしまふと、後はどこからか「ひんから。ひんから。」と鳴く鳥の聲が朗かに聞えて來る。いかにも爽で、玉を轉ばすやうな

朝靄の幄

響が、朝の空氣の中に澄渡る。つぐみの一種とかで、この人は赤腹と呼んでゐる。

朝靄の幄がすでに引揚げられると、旭の光が第一に黒檜山の頂を射る。いかにも爽やかな空氣が胸にしみて、心も跳り出す。山の家を出て、草原を通つて水邊に行く。家の人は、水邊へ行つても餘り大きな聲を出さなと注意する。何故かときくと、牛飼が牛を呼集める時に大きな聲を揚げるので、牛は聲を聞附けると、皆集つて來るからであるといふ。いかにも興味多いことではないか。三輪村から時々登つて來る牛飼は、牛に鹽を與へようと、大きな皿に鹽を入れて、廣い草原へ出ては、「おうい。」と聲を揚げる。山々の牛はその聲を聞いて、林の

(一)上野國群馬郡

中、藪の蔭、叢の中から、我先にと走り出し、牛飼の周圍を取巻いて、大きな鼻をその身體に擦附けながら、口を開いて、舌の上にその鹽の擦りこまれるのを待つのである。あゝ可憐な動物。彼等は常に飼主を慕つて、どんな遠い所に居ても、その聲を聞くと駈出して來て、鼻を鳴らし、身を擦附けて、容易にその身邊を離れないといふ事である。

水邊まで出て見る。水は清冽、底の砂までも見える。岸づたひに林の中を、倒れた枯木などを飛越えて、島の方へ出て見る。水は深碧をたゞへて、いかにも深さうに見える。島は樅の木、檜の林、その他の雜木が鬱蒼と茂つて、蔓草が縦横に蔓つてゐる。不意に一羽の鳥がその林の茂みから飛出して、沼を

横切つて向ふの岸へ飛んで行つた。飽くまで静寂な景色である。

——旅路——

木の一本柱に圓い屋根、

加藤まささを

家の形は

月の夜に、
のぞいて見れば

してゐれど、

秋風が、

雨戸もなければ

圓い柱を

壁もない。

いくめぐり、

きのこのお家は

落葉をふんで

かなしいな。

さらさら、

ごんな貧しい人々が、

夜ふけも知らで
踊つてゐた。

ここにすむかご

——合歡の搖籃——

一四 初雪

坪内逍遙

朝の風一入冷たく、空には雲の往來あわたしく、霰も降來べき氣色なり。空は一面に曇る。風いよよ冷たし。

小止なく

堅き霰に交りて、鹽のやうなる雪、はらりと樹の枝を打つ。暫くはさらりと音立てて、小止なく降る。細かき霰、瓦屋根を打ち、飛石の上を跳ねて、庭中に散布く。

この音暫くにして止み、つゞいて鳥の羽根のやうなる雪、

垣の結目

ひらくと舞落つ。この雪次第に降重り、燈籠の屋根、くひの頭、垣の結目など、綿を着けたるやうになる。地も一面に白く、

樹々の枝みな満開の花を着く。

犬の足跡より消え初む

緑の松は重げに枝を垂れ、南天の實はいよく赤し。
 やゝ小降となる。
 窓さきに雀の聲聞え、笹の雪をりく滑る。
 雪全く止む。空の雲次第に霽れて、薄日の光漏れ、野も山も
 目覺むるやうに鮮なり。
 鳥の聲高き空に聞ゆ。
 空全く霽る。日影一入まばゆし。
 松の枝は自ら跳上り、軒の雫ここかしこより垂る。庭の雪
 は犬の足跡より消え初めて、野も山もやがてもとの姿とな
 る。

風なほ寒し。

— 國語讀本 —

(一) 東京市下谷
 區の境内なり
 寺の境なり
 年公園とな
 る

一五 師走日記

服部 躬治

十二月一日。水曜。朝晴れて寒し。父上お胴着召す。えらが
 りの眞ちやんも、けふはさすがに足袋穿く。學校よりすぐ
 に琴のお稽古にまはる。葵の上^{アヤ}あがる。歸る頃風吹出し、だ
 んだんひどくなりて、暮るゝまで止まず。夜、上野の鐘^(一) 牙え
 て聞ゆ。

二日。木曜。飛石に薄霜おき、南天の枝に見も知らぬ小鳥
 ろたり。冬牡丹一つ咲く。西澤さんに拜借せし「北極奇聞」を
 返す。夕焼の空に、七八日ぶりの富士山鮮に見ゆ。風呂場よ
 りも、二階よりも。

三日。金曜。風寒し。手水鉢に薄き氷見ゆ。けふ始めて襟こし卷す。兄様に肘突ひざ頼まる。母上に端切もらつて、序に自分のも一つ縫ふ。眞ちやん少し風引く。わざと髪を刈り來て、もうなほつた。もうなほつた。」と言ひ言ひ、一人にてなほりしにしてしまひぬ。

(一)兵庫縣廳の所在地神戸市

四日。土曜。朝曇を氣遣ひながら學校へ行く。二時間目に風、三時間目より雨。神戸(一)の姉様より、小包にて御歳暮ツイガイ届く。いつになく早し。返事母上に代りて書く。
小包只今折からの雨の中に到着致候。風は寒けれども、御心入のあたゝかなる御祝物、誠にうれしく存候。御主人へよろしく。此方よりは又改めて。匆々。

うつかりと我が名を書きて、出したる後にて氣がつきたり。御主人へよろしく。は、どう考へてもをかし。雨、風を帯びて、日暮るゝことあわたぶし。

催促
反古

五日。日曜。曇。母上春着の見つもりし給ふ。お手傳して、洗物、張物などの部わけをなす。疊屋に催促の使を出す。午後、文庫の中を片付く。大抵は反古なり。役に立ちさうなる物はほんの少しばかり。何となく心細し。

(Stove)
(暖爐)

六日。月曜。冷々と空晴れたり。霜柱立つ。父上のお書齋に石油ストーブ据ゑつく。夕方微震。
七日。火曜。曇がへ。空風からかぜめきて、日かげ照り曇る。夜、父上の靴足袋編む。

八日。水曜。晴れて暖なり。髪洗ふ。庭松のこずるに、どこの
兒のた楓か引つかゝりて、夕近くまで離れず。兄様やつとの
思して取らる。町田の叔父様より、御旅行にお立ちの由、葉
書來る。冬牡丹また一つ咲きたり。

(一)三越呉服店。
東京市日本橋
區駿河町にあ
り。

落水

九日。木曜。晴。疊がへ終る。大工來て、あちらこちら繕ふ。
母上と買物に三越(一)に行き、序に新曆を買ひて歸る。兄様と
眞ちやんと、裏庭にて落葉を焼く。煙おもしろく、立昇る。
十日。金曜。けふも晴。學校より歸りて、洗物少しす。杉垣
の向ふに、隣の山茶花の花白く見えて、落水の音いと静か
なり。
母上重詰、お雑煮などの獻立し、張面に書きつけ給ふ。口取

見る目美し

には是非梅花玉子を」と差出口して、ためしにけふ料理し
て見る。白身が梅の花弁、黄身が心こゝろ。少し大き過ぎ柔過ぎた
れど、見る目とにかく美しとて、母上に褒めらる。お蔭で夕
飯が遅くなつた」と、兄様例の憎まれ口に、却つて誰より多
く召上る。
十一日。土曜。朝霜日に輝きて白し。うがひの水いつもよ
り齒にしむ。少し後れて琴のお稽古に行く。先生もお風氣
なり。夜、犬頻りに吠えておそろし。遠き半鐘聞ゆ。
十二日。日曜。寒けれど晴、心地よし。深井さんにお能見に
さそはれたるを斷り、家にあて、色々母上の御用を足す。父
上にお客多く、目の廻るやうにて夜になりぬ。

雁が音

十三日。月曜。曇。雨少し降る。町田の叔父様きのふ御歸京の由にて、お出でになる。お土産に米澤紬つと一反いたゞく。十四日。火曜。晴れたる空に風高く吹きて、後れ渡る雁が音聞ゆ。母上お歳暮、お年玉の配りあてし給ふ。側にゐて、品數、家數など、おつしやる通りを勝手用の手帳に書きつく。^(一)カメリヤの蕾、けふやつと破れかけたり。植鐵より梅の盆栽届く。下駄、手袋買ふ。來年の日記帳も買ふ。十五日。水曜。晴。冬牡丹の花五つになりぬ。學校の歸りに、中川さんのお家に寄り、かはいい兎の子を見、少し後れて花のお稽古に行く。夜、齒少し痛む。母上に揉んでいたゞき、早く休む。風すさま

Camellia

じく吹出でたり。電線の響耳につきて落着かれず。

姉妹

一六 紀州蜜柑

世は冬枯の寂しきに、このわたりの郷々は、山々谷々黄金色の果實枝もたわゝに實のりて、朝まだきより蜜柑採る歌勇ましく聞ゆ。高さ所より眺むれば、川尻に動く白帆の影、それやがて蜜柑船にして、箱詰にしたるを、北湊(一)に積下すなりけり。北湊は有田川の河口にあり。數百萬箱の紀州蜜柑みな一たびは、ここに集るなり。半町に五町ほどの防波堤は、二間ほどの高さに積まれたる蜜柑箱もて埋められ、輸送専用の

枝もたわゝ、朝まだき

(一)紀伊國有田郡

防波堤

歸航
傳馬船

汽船二艘かはるく、出帆す。狼の吼ゆるが如き汽笛、浦風に響きて、今しも歸航せる汽船沖に懸れば、親船に運ぶ傳馬船幾十艘、覆らんばかりに蜜柑箱を満載して一時に漕出づる賑、北湊の住民一箇年の生活費は、たゞこの數箇月に得らるとぞいふなる。

送先は東京、名古屋、大阪、京都の四大都府。そこには數十軒の蜜柑問屋あり、荷主より若干の口錢を取りて、仲買に賣捌く。荷主中よりは一名の總代上り來て、問屋の販賣を監督し、賣揚代金を徴収し、一纏としてこれを北湊なる蜜柑方事務所に送り、事務所にては、それく、これを荷主に配達する仕組なり。

口錢

賣揚代金
徴收

蜜柑に温州、大平、小蜜柑の三種あり。温州は品質最も優良にして價貴く、多くは東京に送る。大平これに亞ぎて、品質ま



有田川沿岸蜜柑積出場

されり。小蜜柑は名の如く形小さけれど、味至りて甘し。蜜柑はいつの頃より植始めたるか、確かならず、恐らくは徳川時代に入りての後なるべし。紀州蜜柑の一種に八代といふものあるより見れば、初は九州よりや傳はりけん。又温州といふ一種あるより察すれば、支那(一)の南方よりも來

(一)支那浙江省に温州といふ地あり。

りしならん。されど紀州の有田は地味氣候の適したるにや、海岸數里の地、皆蜜柑ならざるなく、今や數百年來培養の効を経て、かゝる美果の產地とはなりしなり。

櫻の花も、桃の花も、梨も、山吹も散りて、世は五月雨の鬱陶しき頃となれば、有田の里は蜜柑の白き花山谷に満ちて、朝風に薰る高き香は、海を越えて淡路島へも通ふといふ。花散りて七八月ともなれば、彈丸大の碧玉、累々として枝頭にあり、霜を戴くに及びて紅玉となり、十一月に至りて全く熟す。熟するを見て、色の最も赤きものより採る。採りたるは上中下凡そ三等に分ちて箱に詰む。その頃は男女老幼一家總掛りの忙しさ。朝まだきより夜半過まで、目眩しきまでの活動

彈丸大

なり。箱詰にし終れば、蓋にエブを書く。エブとは商標のことにて、かの酒に正宗、劔菱、澤の鶴などの名あるが如く、これにも安諦錦、玉椿、大極上、都の花など、思ひ思ひの名を附くめり。

自修文

一七 縁起の話

縁起といふ詞に二つの意味がある。その一つは神社佛閣の縁起などといふ縁起で、讀んで字の如く、事物の縁つて起るところ、即ち原始の義もとは佛典から出た熟語だといふ。今一つは世俗に「縁起がよいわるい。」又「縁起を祝ふ。」などといふ時の縁起で、前にいつた神社佛閣の縁起とは全く違ふ。勿論右の意味が一轉したのではあるが、人の行末、また事業の成功をその初に祝ふのを「縁起を祝ふ。」と言つたので、再轉しては「縁起」とばかり言つて、嘉瑞と

佛閣 寺
原始 はじめ
佛典 佛敎の書物即ちお経
世俗に 世の中へ俗に
嘉瑞、吉兆 共にめでたいきざし。

卑近
手近なわり
やすいこと。

(一)京都大阪地方
のことに皇居が
あつたので言
つたもの。

先祝ふ
附木はさいて
使ふもの故に
さく硫黄と先
方を祝ふのと
をかけたも
の。

容器
いれもの。

か吉兆きつてうとかいふ意義にも成つたのである。その場合、後世は「縁喜」と文字を書替へても通じてゐる。左に一二卑近な實例を擧げて説明しよう。

東京では大晦日に「晦日蕎麥」といつて、蕎麥を食べる。何故大晦日に蕎麥を食べるかといふに、蕎麥は長くのびるもの故、身代しんたひののびるのを祝ふのである。又東京の風俗で、轉居する時「引越蕎麥」と稱して、新宅の四隣へ蕎麥を配る事のあるのも、やはり細く長く交際の出来るやうにといつて、縁喜を祝ふのである。

又大阪で附木を配るのも、やはり上方かみかたの縁喜を祝ふ風俗である。附木は薄い板の先に硫黄が着いてゐる。昔は竹の先へもつけたもので、これをたゞ「硫黄」とばかり稱してゐた。そこでこの附木を配るのは、「先祝ふ」といふ謎で、やはり縁喜を祝つてゐるのである。餘所よそから祝儀の赤飯などをもらふ。その容器の重箱には、どこ

でも南天の葉を敷く。南天を「難轉」の語に響かせて、災難を轉ずる心だといふ。その重箱をあけて中に附木を入れて返すのも、亦「先祝ふ」といふ心の縁喜である。

又徳川時代に、女子が「おいはひ」と假名でかく場合には、「おいはひ」と書いたが、これもいはひでは、亡者まじやの位牌いはいと同じ詞に聞えるのを、忌んだのである。以上のやうな事を分類して見ると、凡そ四種類ほどになる。

まづ支那の眞似まねをしたものからいふと、孝徳天皇(一)の御代に、長門の國から白雉を献上した。これは嘉瑞吉兆であるといふので、年號を白雉と改めた。これが日本で縁喜を祝つた初であらう。鶴龜つるかめだの、松竹梅だのをおめでたいものにしたのも、支那から傳はつた風俗である。

次に日本の創意に移つて、おめでたい意味に聞える言葉で物

亡者
死んだもの。
分類
種類によつて
わけること。

(一)第三十六代。

創意
はじめての思
ひつき。

出陣 いくさに出る
 打鮑 へがしのぼし
鮑の肉を薄く
へがしのぼし
びともいふ
 搗栗 栗を十分乾
して火であぶ
り、殻と皮を
取去つたも
 三方 白木の臺で足
あるもの

を祝つた例を挙げると、正月の餅は昔から祖先のお祭に用ひたものであるが、これに附屬した品物は、残らずおめでたい意味をもつてゐる。まづ御供餅の下に敷く裏白は、深山に在つて、霜雪に凋まなぬめでたい草で、その上漢名を齒朶といふ。齒は齡とよみ、朶は枝で、命長くのびる枝といふことである。また橙とゆづり葉は、親子代々譲り受けて、子孫長く繁昌する意味である。武家の時代には、出陣といふと、打鮑と搗栗と昆布を三方に載せ、これを肴にして祝盃をあげる。これは打つて勝つてよる昆布といふ意味に寄せて祝つたのである。鯉節を祝物に使ふのも、元は勝武士の意味であつたが、今では何の意味もなしに、たゞおめでたく使はれてゐる。

それから事物におめでたい名をつけて祝ふといふのは、子供の名に長松、鶴太郎、お龜、お千代などをつけるのは、長命を望む心

翁格子 大きな格子の中
に小さな格子の子
のいくつもある模様

であり、男兒の祝着に翁格子を染めるのも、翁といふ縁喜である。又不吉を忌み避ける著しい例は、死といふ音に通ずるといふので四の字を忌み、四十二歳の二歳兒は、四二しにとも四四ししともなるから、一旦捨てて、更に拾つて育てるといふ風習。その子は名前も捨吉とか、お捨てか呼ばれるなどといふことがある。

最後に不吉な言葉をおめでたい言葉に言ひかへるのは、婚禮の席に「歸」といふのを嫌つて、「お開きにする」といふやうな例で、忌言葉といつて、今もなかく、廢れずに行はれてゐるものである。


— 關根正直の文による！ —

一八 百人一首物語

餘りの賑はしさに、一度寝入られし祖父も出で來られて、

ここを先途

「おのれも仲間入りせん。」と、大いなる黒縁の眼鏡かけて、
山風。」と讀上げらるれば、興味も一入加りて、ここを先途とカ
ルタ拾ひ上げんと競ふ人々、皆血眼なり。兄弟姉妹はいふも
さらなり、父も母も從兄弟姉妹も、隣の人も、下女下男まで打



蹟筆之貫紀

あきからに
まきのしを
まばむべや
まかせを
むらしてふ
むらしてふ

散りばふ

維りて、笑ひさづめく賑はしきは、新年の遊にはいとふさは
し。
面白きは、人々の前に散りばひたるカルタの畫にも、種々
の歌人の集れることなり。天皇あり、皇子あり、大臣あり、學者

叔姪

(一)和泉守橘道真
の妻、後一條
天皇の中宮上
ふ、門院に仕

(二)同じく上東門
院に仕へ、早
世す

人 一かどの歌
秀歌

(三)藤原氏。寛徳
二年(一七〇
五年)薨

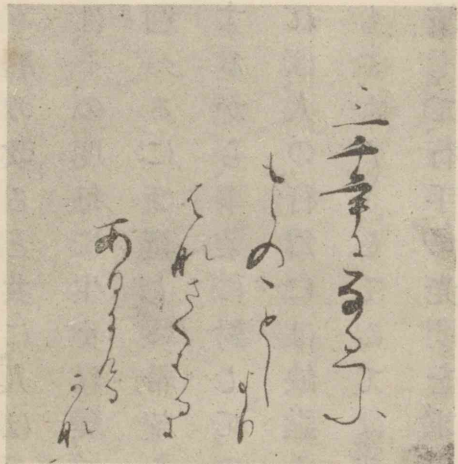
あり、僧侶あり。更に注意してよくく、觀れば、その歌人中に
も、親子、兄弟、叔姪等の關係のあるも少からずかし。あらざら
んこの世の外の。」と詠める和泉式部の娘に、小式部内侍あり。
和泉式部の子なれば、小式部とは呼ばれたるなり。母の子と
て一かどの歌人なりしが、年に似合はぬ秀歌の多ければ、「こ
は必ず母の代作なるべし。」と時の人も思ひたりけん、或年和
泉式部が夫と共に丹後の國に下りけるに、小式部内侍一人
京都に留り居ける折しも、禁中に歌合の會あり、權中納言定
頼、小式部に向ひて、「詠進の期も迫り侍り。出し給へる丹後へ
の御使は歸り來りしか。」と戯るれば、小式部内侍ほゝゑみて、
定頼卿の袖を控へ、

(一)藤原頼忠の子。四條大納言。久二年(一〇七〇)薨。長七十六。
 (二)兵部卿。
 (三)俗稱良峯宗貞。雲水院に住す。寛平二(一一七〇)年薨。年七十。
 (四)俗名良峯支利。雲林院に住す。因院に住す。阿保親王の第二子。寛平五(一一七三)年薨。年五十三。
 (五)阿保親王の第六子。元慶四(一一八二)年薨。年五十四。
 (六)阿保親王の第五子。右近衛中將。元慶四(一一八二)年薨。年五十四。
 (七)望行の子。土佐守。善頭。天慶九(一一八七)年薨。年六十。
 (八)有友の子。延喜年中大内記となる。房則の子。延喜年中内藏大允に進む。

大江山いく野の道の遠ければ
 まだふみも見ず天の橋立
 と詠みかけたり。定頼卿驚きて返歌にも及ばず、「こはあさまし」と袖引放ちて逃歸りぬとぞ。名こそ流れて」と詠める大納言公任卿を父とし、「朝ぼらけ宇治の川霧」の歌詠みし人にも似合はぬ拙さよ。
 陽成天皇の皇子に元良親王おはし、僧正遍昭の子に素性法師あり。中納言行平と在原業平朝臣とは兄弟にして、貫之と友則とは従兄弟同志なり。清原深養父の孫は清原元輔、元輔の子は清少納言なり。源氏物語書ける紫式部の娘に大貳三位あり、物語の作者として知らる。思ひ入る山の奥の歌詠

(一)春光の子。肥後守。正暦元年(一〇一〇)卒。年八十三。
 (二)一條天皇の皇后定子に仕ふ。
 (三)藤原爲時の子。藤原宣孝の妻。後、上東門院に仕ふ。
 三千年なるてふものことしよはるはなさくはるにあひにけるかな
 (三)本名藤原賢子。高階成章の妻。後一條天皇の乳母。
 (一)藤原俊忠の子。五條三位と稱す。元久四年(一一八六)薨。年九十一。
 (二)京極中納言と稱す。仁治二年(一一九〇)寂。年八十。

みし皇太后宮大夫俊成こそ名だたる歌人にして、その子の權中納言定家は即ちこの百人一首の撰者なり。まきの葉に霧立昇る」と詠める寂蓮法師もこの人の従弟なりけり。



藤原定家筆蹟

「世を思ふ故に物思ふ身は」と仰せられ、なほ餘りある昔なりけり。と遊ばされたる、そのかみを思ひ出でては、拾ひ取るカルタの手も、自らわななく心地ぞする。

(三)僧俊海の子。
建仁二年(一
八六二年)寂。

一九 新年

曆の改ると共に、人は一歳づつ年をとるのであるが、實際は、その度毎に生まれ變つて若くなるのである。新しい年を迎へるには新しい希望を以てするので、今年こそはと奮發するから、事業に對しての勇氣も生ずるのである。過去を顧れば、人の行爲には缺點もあり、失策もある。それをいつまでもくよく／＼してゐては、前途の發展は望まれぬ。過去は水に流して、行手に光明を求めるのが、處世の良法である。そしてその好機、即ち年の改る日である。

我が國には、昔から大祓といふ祭式によつて、過去のあら

くよく／＼
水に流す
行手に光明
を求む

復活

ゆる罪を一掃し、汚れた心を打棄てて復活するといふ風習がある。これは六月と十二月との二度行はれたもので、即ち我が國民は、一年に二回づつ心身共に新になつて、復活し來つたのである。この大祓の式は今でも行はれて居る。就中十二月は、年も新になる前であるから、この復活の儀式が盛大に、且嚴格に行はれるのである。そこで、我等は新年を迎へる用意としては、身分相應に、出來るだけ一切の物を新にし、清くして、形の上にもこの復活の義をあらはすことに務めるのである。春秋に富む壯者は勿論、還暦に入り、古稀に達する老人でも、その生まれ變る心持には異なるところがない。

春秋に富む
還暦

簡樸

正月の儀式は、太古の質素簡樸の風を傳へて、今日に至つたものである。注連繩しづなや、讓葉たまはや、白木の三方さんぱうや、土器どきや、昔ながらの祖先せんぜん以來の風を繼承けいじんして、毎年繰返してゆくところに妙味がある。即ち年々生まれ變ると同時に、年々昔を憶ひ出してゆくのである。祖先から傳はつた掛物を懸けたり、古い道具を出したりして、遠い昔を憶ひ出すのである。

宗家

四方拜
元始祭

我が國民の宗家と仰がれ給ふ皇室に於ては、我等が一家に於て、家の祖先を祀ると同様に、新年には四方拜や元始祭を行はせられ、又内外臣僚を召させ給ひて拜賀を受けさせられ、御宴を賜ひなどし給ふ。これを思へば、余等は今の世ながら、直ちに太古建國の昔を憶ひ起さずには居られぬ。余は

橘曙覽(一)の

春にあけてまづ見る書も天地の(二)

はじめの時とよみ出づるかな

といふ歌を、早くから深く感心して居た。これかの

(三)荒木田守武の句

元朝(三)や神代の事もおもはるゝ

と同一の思想であつて、日本人の心には、元旦と神代とは離れぬものである。

二〇 お日様の船出

與謝野晶子

お日様、お日様、

若いお日様。

(一)越前國福井の歌人。明治三十七年歿。
(二)古事記のこと。

鹿島たち

けふはあなたの鹿島たち。

正月元日瑠璃色の
海になびいた霞幕、

その紫をすこ分けて、

金のお船に玉のかい、

東の空に帆を揚げる。

めでたや、めでたや、

おめでたや。

お日様、お日様、

若いお日様。

けふはあなたの鹿島たち。

金のお船に積みあまる

熱ご光は世を温め、

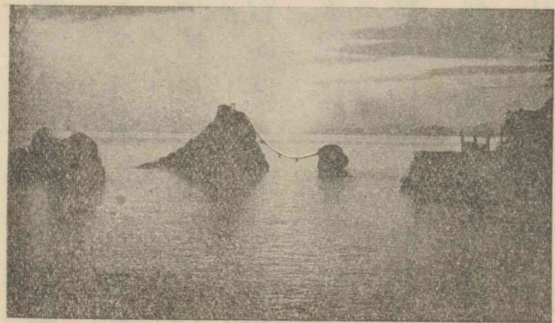
真紅の帆から洩る風は、

長閑な春を地に満たし、

そして行手は花ざかり。

めでたや、めでたや、

おめでたや。



二見浦の日の出

日本童謡選集
——日本童謡選集——

二一 國歌と國旗

吹奏

温情に滿つ

國歌「君が代」の吹奏せられる時、我等の心には我が國體と歴史を思つて、非常に懐かしい、さうしてうれしい情が湧立つのを覺える。その曲は誠に平和で、温情に滿ちて居つて、何となく「義ハ君臣ニシテ情ハ父子」といふ感を引き起させる。その歌の内容が、たゞ君が代を千代に八千代にと祝ふところに、殊に我が國體の表れてゐるのがうれしい。國歌は最もよくその國體を表す。西洋諸國の國歌を見れば、同じく「皇帝に幸あれ」と歌ふ歌にも、それを神に祈るのである。又帝王を祝する外に、或は國民を歌ひ、或は國土を歌ふ。民衆から成上つた

王室、國土とは全く別である王室を戴く國民としては、當然の事である。

「君これ神」なる我が國に於ては、天皇の御長壽を更に神に祈る必要はない。「君これ國」なる我が國に於ては、君の祝福の外に、別に國土の祝福を祈る必要はない。「君これ父」なる我が國に於ては、皇室の繁榮より外に、人民の幸福を願ふ必要はない。

大君の御代が長久であるといふ中に、人民の幸福も國土の繁榮も含まれて居る。單に天皇の御長壽を祝賀するのが、即ち我が國家、我が臣民のあらゆる祈願を含んで居るところに、日本の國體があるのである。三十一文字の短い歌、これ

祝福

國體美
赤誠

が數千年來の國體美をあらはし、七千萬人の赤誠をあらはした國歌である。

我が國の國旗は白地に太陽をゑがいて居る。その單純な様式に於て、諸外國の國旗と異なつて居る。すべてに於て、單簡を喜び、清潔を愛する國民の趣味には、最もよく合して居る。さうして日本といふ意味をば最もよくあらはしてゐる。

朝なく
現實
信念

日本は東半球の最東部に國を成して居るので、朝なくさし上る初日の光は、他の諸國に先だつて、第一に我が帝都を照らすのである。日本といふ國名も誠に現實である。皇祖天照大神は即ち日神であるといふのが、我が國祖先の信念であつた。この歴史も亦國旗の上にあらははれて居る。

象徴

日の丸は日本國の象徴である。さうして又日本人の赤心「明き淨き心」の象徴とも見られるのである。

君が代の國歌の歌はれる處、日の丸の國旗の翻る限り、我が皇室の稜威が輝き、我が國民の活動があるのである。

二二 伊勢神宮

齋きまつる

伊勢神宮には内外の二宮がある。内宮は皇大神宮と申し奉り、畏くも皇祖天照大神を齋きまつり、御靈代は三種の神器の一たる八咫鏡である。外宮は豊受大神宮と申し奉り、豊受大神を齋きまつる。參宮線の山田驛に下車すれば、外宮の神域まで僅かに數町である。神殿の造りざま、御屋根は萱葺

神域

丹青の飾

で、檜の木の白木、丹青の飾のないところに神代の質素なさまも思はれて、この上もなく尊い。



五 十 鈴 川

外宮に参拜して内宮に参る。間の山を越えて五十町の道程である。五十鈴川にかけた宇治橋を渡り、神路山の森を仰いで神苑にはいる。廣い芝生に若松の緑新しく、掃ひ清められた道には塵一つもない。何といふ心持のよいことであらう。愈進めば生茂つた古い杉、古い檜の木、人間の世を離れたやうに思はれて、神威の尊さがしみぐくと身に

神苑

しむ。一の御鳥居をくゞつて左へ曲り、二の御鳥居を通つて御垣の下に跪く。飾らぬ彫らぬ白木造の御宮、神々しいといふより外はない。むかし芭蕉がここに詣でて、

何の木の花とも知らず匂かな

と歌つたのも思ひ出されて、しばし瞑想をこらすうち、我が國體の尊さを思ふ心が、油然と湧出るのである。

神宮は古來皇室の御尊奉最も厚く、久しい間皇女が齋宮として御仕へ遊ばされる例で、數百年の間續いたが、後醍醐天皇の御代からその事は絶えた。今は祭主には皇族が任せられるので、久邇宮多嘉王殿下が今の祭主宮であらせられる。

齋宮

油然

瞑想

(一)第九十六代。

二三 憲法發布

落合直文

(一)明治天皇

明治二十二年二月十一日は、皇祖神武天皇即位紀元二千五百四十九年の大祝日なり。我が惠深き天皇陛下には、畏くもこの日を以て憲法を發布せられぬ。待ちに待ちたる三千五百萬の臣民の喜はいかにありけん。

しつらふ

有司

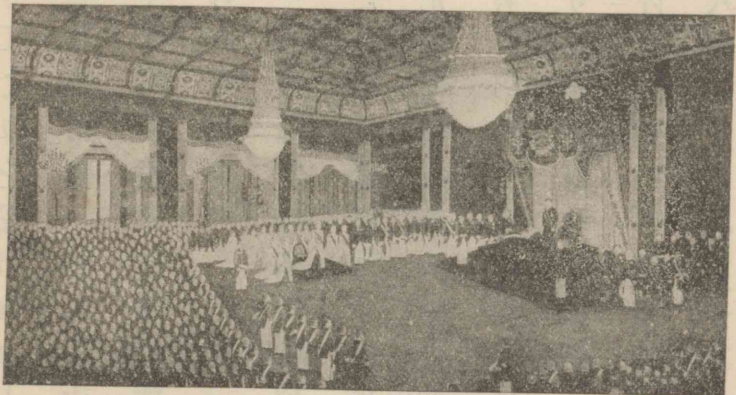
この日の式場は千代田の宮の正殿にして、いと麗しうしつらはせ給へり。中央に天皇陛下の玉座を設け、その左右に各宮殿下、各華族、百官有司、各國公使等の座を設けたり。朝の間雪少し降りしが、やがて麗に霽れわたれり。

賢所

午前九時、天皇陛下にはまづ賢所を拜ませられ、憲法發布

(一)實美。實萬の子。明治二十五年薨。

(二)清隆。明治二十六年薨。



憲法發布式

の旨を申しのべさせ給ひ、午前十時、天皇皇后兩陛下には侍従に神器を捧げまつらしめて、君が代の奏樂の裡に、正殿に臨ませられ、ついで玉座に着かせ給ふ。かくて三條内大臣恭しく帝國憲法を獻りしに、天皇陛下には御聲麗しく勅語を讀上げさせ給ふ。やがて黒田内閣總理大臣御前に進み出でしに、天皇陛下には御手づから帝國憲法を授けさせ給ふ。總理大臣跪

(一)神武天皇陵
 (二)孝明天皇陵
 (三)右大臣。明治十六年薨。年五十九。
 (四)鹿兒島藩主齊興の三男。左大臣。明治二十年薨。年七十一。
 (五)舊山口藩主。明治四年薨。
 (六)舊高知藩主。容堂と號す。明治五年薨。
 (七)舊佐賀藩主。閑叟と號す。明治四年薨。
 (八)參議兼内務卿。明治十一年。年宛徒に殺さる。年四十七。
 (九)内閣顧問官。明治十年薨。年四十四。
 (一〇)陸軍大將。明治十年兵を擧げ敗死す。年五十一。
 (一一)水戸の儒臣。

きてこれを受け奉りし時は、滿場の群臣皆喜の色をあらはせり。時に百一發の祝砲は盛に殿外に響きて、いと勇まし。かくて再び君が代の奏樂起りしが、兩陛下には靜かに入御あらせられぬ。

この日伊勢神宮、畝傍山及び月輪の山陵には、特に勅使をたてさせ給ひて、その旨を告げさせ給ひ、又岩倉具視、島津久光、毛利敬親、山内豐信、鍋島直正、大久保利通、木戸孝允の墓にもその旨を告げさせ給ふ。かくて大赦を行はるゝはさらなり、西郷隆盛の賊名を除き、正三位を贈らせ給ひ、藤田誠之進、佐久間修理、吉田寅次郎等には正四位を贈らせ給ひ、又全國八十歳以上の男女には金を賜ふなど、ひろき御惠のほど、い

東湖と號す。安政二年(一八五一年)の大地震に死す。年五十。
 (二)信濃の人。象山と號す。元治元年(一八六〇年)刺客に殺さる。年五十四。
 (三)長州藩士。松陰と號す。安政六年(一八二五年)刑せらる。年二十九。
 舞樂
 腥き風
 血の雨
 和氣洋々

たり及ばぬところもなし。かくて午後零時三十分、兩陛下には青山の觀兵式に臨ませ給ふ。その行幸を拜み奉らんと、御通輦の道には人を以て山を築けり。この夕、百官有司に謙を賜ひ、夜に入りて舞樂などの御催あり。あはれ、他の國々にて憲法を發布するや、常に革命擾亂のあまり、腥き風を吹かせ、血の雨を降らすが例なり。さるを、君臣上下和氣洋々の裡に、かゝる大典を擧げさせられぬ。我々は多言せず、たゞかゝるめでたき國體は、他にまたあるかを問はんのみ。

—中等國語讀本—

紀元以前
神武天皇の御
即位以前

殖林
樹を植ゑて林
をなすこと

歸化
日本の國の人
となること
豪族
勢力のつよい
家柄

便宜
都合のよいこと

(一)朝鮮人。

(二)朝鮮半島のこ
保護國
護つてやつて
居る國

自修文

二四 古代に於ける日鮮の關係

日本と朝鮮とは、大昔から深い關係をもつてゐて、古く紀元以前に日本から渡海した人もあれば、朝鮮から日本へ渡つた人も少くない。天照大神の御弟の素戔鳴尊は、その御子五十猛神をつれて新羅へ渡り、木の苗を持歸つて、紀伊國やその外の内地に殖林した。中にも熊野附近が最も樹木に適したので、木の國といふ名もついたといふ。

次に向ふから日本へ來た者では、新羅の王子と稱する天日槍といふ者が一番古いと傳へられてゐる。これは素戔鳴尊の御子孫の大國主神が、出雲地方を治めて居られた時に渡海して來て、その勢力に屈服し、遂に歸化して但馬に住居し、子孫蕃殖して、その地の豪族となつた。神功皇后の御母方は天日槍の子孫である。

故に神功皇后は征韓の上に御便宜を得られたことと見える。又大國主神が出雲地方を治めて居られた時に、朝鮮の南端を日本に引寄せたといふ傳説がある。即ち「國來い」と言つて引寄せ、それを出雲へ縫附けたといつてゐるが、實際は韓人を多く日本へ移させて、殖民した事實と見るのが至當である。

神功皇后の征服以後約四百五十年にわたつて、半島を保護國としてゐた間、双方の往來交通は頻繁で、戦争も度々あり、平和な貿易も盛にあつたから、この四百五十年間が、古代に於ける日本と朝鮮との密接關係のあつた時期で、當時日本では、土地の割合に人口が少いから、移民を歓迎したので、盛に朝鮮から移民を引寄せた。これ等の人々の中には、農民も職工もあらうが、主に機織を業として居た。絹織物がこの後日本に發達したのは、この移住民の力である。この人々は、もと支那人で朝鮮に移住し、それから

轉住
更に他へ移住
すること
純朝鮮人
全くの朝鮮
人のほんとう
の朝鮮人。

(一)第五十代。
(二)第二十九代。
(三)敵に捕へられ
た時、敵將は
「日本王我がわ
しり」をくらし
めようとす
ると、反對に、
羅王我がしり
をくらし、へ
呼んで、終に
殺された。
(四)第十五代。
(五)支那人種。

又日本へ轉住したものであるが純朝鮮人の移住したのも少くはない。前後の移住民の統計がないから分らないが、ざつと四分の一はこれ等の移住民である。そしてこの人々は男女とも移住したのであるから、韓の婦人も當時澤山に來たであらう。又日本人も朝鮮に移住したのは少くないから、自然内地にも、朝鮮にも、雜種の子が殖えた事は言ふまでもない。今でも日本人中に朝鮮式の顔が多少あるのは、この系統を引いてゐるのであらう。

蝦夷征伐で有名な坂上田麿と、その子の坂上田村麿なども歸化人で、しかも桓武天皇の大功臣となつたのである。それより古く欽明天皇の時に、新羅征伐に出て敗軍し、新羅に捕へられた時、敵の大將を罵つて殺されたといふ豪氣な調伊企儼といふ武人なども、先祖は應神天皇の時朝鮮から來た漢人種である。この時伊企儼の妻の大葉子も捕虜となつたが、この大葉子を詠んだ

歌に、

(一) 韓國の城の邊に立ちて大葉子は

領巾振らすもよやまとへ向きて

といふ有名な歌がある。この歌は、大葉子が夫と同じく敵の前でわるびれもせず、城の上から日本の方を向いて領巾を振つて、最後の遙拜をした後、勇烈な最期を遂げたのを見て、日本人の感じて詠んだのである。この時伊企儼の子も父と共に戦死をした。夫婦親子打揃うての義烈は、めざましい事であるが、やはりこれも韓國人の血統である。

又當時は婦人も勇悍で、夫と共に従軍する者のあつた事に注意せねばならぬ。獨り大葉子のみでなく、夫と共に遠征に従軍したのは希有の事ではない。當時はこの外にも澤山例があつた。上毛野形名の妻などもその一人である。

(一)大葉子は朝鮮
の城の邊に立
つて、故郷の
我が方へ向ひ
本を振つて居
るよとの意に
領巾を振つて
頷く。正装の
頭巾は昔婦
人か正装の時
とされた。布
遙拜は、はる
かにをが
むること。
最期は、命の
終。
義烈は、義
心のすぐれ
てゐること。
遠征は、遠
國を征伐す
ること。
希有は、珍
しいこと。
(二)第三十四代
舒明天皇の時
蝦夷の討
つて、敗れ、
して逃れ、
た時、妻に
まされた。遂
に蝦夷を平
たし、得た。

思ひよそふ

霞山添氣色
山ひめのか
ざしひのさく
らまださきよ
りおもかけ
すほふ朝が
みかな
幽齋

(一)名は持資。
めて江戸城を
築く。文
八年(二)明
十六年(一)文
十五。歿年四
五

幽齋從卒に向ひ、「何を以て敵の遠からざるを知り得しぞ。」
と問ふ。從卒答へて、古歌に「君はまだ遠くは行かじ我が袖の
袂の涙乾きはてねば。」と詠めり。さきに馬の鞍いまだ温なり
しかば、右の歌に思ひよそへて、その遠からざるを知りたり。」



蹟筆齋幽川細

といふ。幽齋手を打ちて、「さて、今この世に無用とおもひし
和歌の道にも、さやうの徳はありけるよ。」とて、これより師に
就きて、ひたすら和歌の道にいそしみぬ。

太田道灌がこの道に志し、にも、亦これと相似たる話あ

末おそろし
血氣の頃



灌道田太

り。道灌は初め左衛門大夫持資とて、關東の管領上杉が臣に
て、幼時より大膽にして、人を人とも思はず、武道をのみ好み
て、末おそろしと稱せられしが、血氣の
頃鷹狩に出で、雨にあひて民家に入り、
蓑を借らんといふに、主の少女何とも
答へずして、山吹の花一枝を差出せり。
持資心得ず、そのまゝに歸りしが、後或
人の、「それは、『七重八重花は咲けども山
吹のみの一つだになきぞ悲しき。』といふ古歌の心なるべし。」
といふを聞きて、持資始めて風流の趣味あるを解し、それよ
り和歌文學に志を寄せたり。

(一)足利第八代將
軍。延徳二年
癸丑(一五〇六)
年五十六。

後義政(一)に見えんとて京に上りし折、後土御門天皇勅して、
武藏野の有様を問はせ給ふ。道灌歌を以て答へたてまつる。
「露おかぬ方もありけり夕立の空よりひろき武藏野の原。」と。
また隅田川の都鳥を問はせ給ふに、「年ふれど我がまだ知ら
ぬ都鳥隅田川原に宿はあれども。」さらば汝が館の風景はと
ありければ、「我が庵は松原つゞき海近く富士の高嶺を軒端
にぞ見る。」と答へ申し、かば、叡感淺からず、御製を下し給ふ、

武藏野は刈萱のみと思ひしに

かゝる詞の花もさくかな。

叡感

詞の花

二六 諏訪湖畔の冬

島木赤彦

(一)諏訪湖の東
方。山梨縣に
跨る。海抜
九六七尺。
(二)品山とも書
く。八ヶ嶽の
北。諏訪湖の
北。海抜八
三四九尺。
(三)諏訪湖の東
方。海抜六二
〇四尺。
(四)長野縣の殆
ど中央に位す。
東。西。一里半。
南。北。一里。周
回。四里。二十
町。
(五)長野縣諏訪郡
豊平村。

富士火山脈が信濃に入つて八ヶ嶽(一)となり、立科山(二)となり、
霧ヶ峰(三)となり、その末端が大小の丘陵となつて諏訪湖へ落
ちる。その傾斜の最も低い所に私の村落(四)がある。傾斜地であ
るから、家々石垣を築き、僅かに地をならして宅地とする。最
高所の家は丘陵の上(五)にあり、最低所の家は湖水に沿ひ、その
間の傾斜地に、百戸足らずの民家が散在してゐる。
山から丘陵、丘陵から村落へ續く木立が、皆落葉樹である
から、冬に入ると、傾斜の全面が皆あらはになつて、湖水から
反射する夕日の光が、この村落を明るく寒くする。寒さが追
追に加つて、十二月の末になると、湖水が全く氷結する。
湖水といつても、海面から二千六百尺の高所にあり、村落

はその湖水よりもなほ高い丘上にあるのであるから、嚴冬の寒さは非常である。朝、戸外に出れば、鬢の凍るのは勿論であるが、時によると、上下睫毛の凍著を覚えることすらある。かやうな時は、顔の皮膚面に響き且裂けるが如き寒さを感じずる。

この頃、私の村では、毎朝未明から、かあんくといふ響が湖水の面から聞えて来る。これは、人々が氷の上へ出て、たきといふ漁をするのである。長柄の木槌で氷を叩きながら、十數人の男が、一列横隊を作つて向ふへ進む。槌の響で湖底の魚が前方へ逃げるのを段々追ひつめて、豫め張つてある網にかゝらせるのが「たき」の漁法である。私の家は村の最

視線

高所にあり、庭下の坂がすぐ湖水に落ちてゐるので、一列の人々を見るには、可なり俯目にならねばならぬ。俯目になつた視線が、氷上の人まで達する距離は可なりあるのである。氷上の人の槌を揮ふ手つきまで明瞭に見える。氷を打つ槌先が視覺に達する時、槌の音はまだ聽覺に達しない。次の槌を振上げる頃に、漸く前の槌音が聞える。それで槌の運動と音が交錯して、目と耳へ來るのである。目に來るものも、耳に來るものも、微に徹して明瞭である。單にそればかりでない。一列の人々の話聲までも、手に取るやうに聞える。空氣が澄んでゐる上に、村が極めて閑靜であるからである。氷きりの作業は、快晴の夜を擇んで行はれる。温度が低下

交錯する

扮装

して、氷の硬度が増すからである。これは若者でなくては到底堪へられぬ勞作である。若者は、宵の口から藁製の雪沓を穿き、その下にかつちきかんじきのことをつけて湖上へ出かける。綿入を何枚も重ねた上に、厚い絆纏を纏ふので、體はいはゆる着ぶくれになつて、横も豎も同じに見えるといふ姿である。かやうな扮装をした若者が、氷の上に一列に並んで、氷を鋸びきにひき始める。氷を引く手元は、初め暗くて後に明るい。氷に眼が慣れるのである。三尺四方ほどの大きさにひき離される氷の各片が、切離されると共に水中に陥る。それが氷鋸と稱する大きな鋏で挟み上げられる。挟み上げられた後の水には、星が映つて揺れてゐる。大凡一望平坦の



冬の諏訪湖

爲に氷が収縮するのである。それが氷原を越えて四周の陸

氷原にあつて、空は手の届くやうな低さを感じる。星が降る如く光り満ちてゐるのである。星の光は、水にあつて水の明りとなり、氷にあつて氷の明りとなり、その明りに全く慣れるに及んで、相隣する人の顔まで明瞭に見えるやうになる。夜が漸く更けて、寒さが益加ると、氷原の所々に龜裂の音が起る、寒さの

睡氣ざまし

地山地まで響き渡る。その響の中に立つて鋸をひいてゐる若者の背中には汗が流れ、暫く立つて休息してゐると、その汗が背に凍りつくのを覚える。さういふ時には、鋸の手を休めないやうにするのが、唯一防寒の手段になるのである。それ故、若者はたゞせつせと切る。腕が疲れると唄も出ない。ただ時々睡氣ざましに大きな聲を張上げるものもあるが、それも永くは續かない。餘り疲れて寒くなれば、氷の上で焚火をすることもある。かやうにして夜が白んで來ると、氷の上に積まれた氷板が、山の如く累り、それが夜明から運んで、湖岸のたんばに積上げられるので、たんばには連夜切上げられた氷板が、長い距離にわたつて正しく積並べられて、恰も

夜が白む

壘壁

白晝

氷の壘壁（いすい）を築いた如き觀を呈する。積まれた氷には多く筵類を被せて置くが、覆がなくとも、白晝の日光で溶けるやうな事はない。海拔二千五百尺の地のいかに寒いかといふ事は、これで想像し得られるであらう。

私の村は又夜になると、所々の家から藁を打つ槌の響が聞える。氷きりなどに行かぬ人々が、草鞋や雪沓を造るのである。ひつそりとした夜の村に響く槌の音は、鈍くて重くて底のない響であり、聞いて居れば居るほど、物遠い感じがする。氷たゞきの槌の音は、遠くて近く聞える。藁をうつ槌の音は、近くて遠い感じがする。響くところは相反するけれども、静寂に歸するに於て一である。

物遠い感じ

静寂に歸す

二七 雪物語 その一

一敗地に塗る(一)二條天皇平治元年、藤原信賴、源義朝の起せし亂
(二)長田忠致、義朝の家臣
返忠(三)平氏の邸のありし處、今の京都市下京區
(四)美濃國
雜仕

平治の亂に義朝一敗地に塗れ、東國さして落延びようとしたが、長田が返忠に、尾張の國で討たれた。前の右兵衛佐頼朝も、彌平兵衛宗清の手に生捕られ、二男中宮進朝長も首になつて、六波羅に着いた。夜叉御前とて十一歳の女子、わらはも義朝の子なり。とて、一人宿を立出でて、杭瀬川に身を投げて死んだ。この外に、九條院の雜仕常磐の腹に三人の男子ある筈との嚴しい詮索。常磐聞いて、身一つにてさへ忍び難きに、三人の子供を引具しては、誰かはしばしも宿かすべき。まづ年頃頼み奉りたる観音にこそ歎き申さめ。とて、八つにな

しほに

祈請

(一)義朝のこと
綺羅を飾る

よしみ

心あてに

る今若を前に立て、六つの乙若の手を引き、牛若は二つなれば懷に入れて、たそがれ時、人に顔見られぬをしほに、足に任せて宿所を出た。佛前に參つても、二人の子供を脇にすゑて、泣く／＼終夜の祈請を遂げた。

日頃は左馬頭が最愛の妻女とて、供人まで綺羅を飾つたが、今はそれに引替へて、身もやつれ、歎きに泣きしをれた姿目も當てられず。師の僧もあはれに思つて、しばしは忍びておはしませ。と慰めたが、常磐「ここは六波羅近ければ、しばしとても安心なり難し。日頃のよしみまことに忘れ給はずば、観音によく祈りてたび候へ。」とて、これよりは、大和國宇陀郡を心あてに迷ひ出た。

(一)永曆元年。

露と争ふ涙

苦節

(二)讃岐國木田郡。

(三)長門國豊浦郡。

(四)小野務の詠。

二月十日のことなれば、空吹く風もなほ寒く、路行く足は雪に破れ、露と争ふ涙には、袂も袖も絞るばかり。一人を懷に、二人の子の手を引き、腰を押へて行惱む有様、見知らぬ人々もあはれを催さぬ者はなかつた。嗚呼、この苦節、この懷の一子こそ、後には源氏の武將として、平氏を屋島壇の浦に殲にして、父祖の仇を報いた源九郎義經である。

雪深き山ふところのちご櫻

花咲かんとは思ひかけきや。

二八 雪物語 その二

幼時、母の懷に抱かれた時と同様の吉野山の雪ぶみ。義經

末路

講堂

詮議

(一)佐藤元治の子。三郎と稱す。

(二)平教盛の子。(三)四郎と稱す。

屠所へ歩む羊

(四)藤原基衡の子。陸奥鎮守府將軍。

の末路は實にあはれであつた。吉野山の大眾は頼朝方の咎を恐れ、講堂に打寄つて討取る詮議最中。奥州から従つて來た二人の兄弟、兄嗣信は屋島の戰に能登守教經の矢に斃れて、その弟の忠信、雪の上に跪いていふには、「我等が今の身の上は、屠所へ歩む羊に異ならず。君は早く落延びさせ給へ。忠信ここに踏止つて、一方の防矢仕らん。」といふ。義經志はうれしけれども、兄嗣信の討たれし後も、其方一人あれば、なほ兄弟揃へる心地したり。年の内は幾程もなし。來春は陸奥に下らんと思へば、其方も永らへて秀衡にも會ひ、國にのこしたる汝の妻子をも見よ。」といふ。忠信承つて、治承二年陸奥を出でし日より、「君に命を奉つて名を後代に揚げよ。矢に當り死

供養
(一)岩代國。今の福島市の邊。

せりと聞かば、秀衡供養すべし。』と教訓を承れり。信夫の里にのこし、老母一人あり。これもその時最後と申し切つてあれば、生きて故郷に歸らんとも存ぜず。』と決心した詞に、義經は日頃身に着けた太刀、鎧を與へ、自らは忠信が鎧を着て、大和路さして落ちて行つた。

(二)平塚。蘆薈の詠。

懷(二)にふしみの雪をみよしのの

そでふる山におもひいづらん

靜御前は吉野までは同行したが、これもここにて義經に別れ、女性の身のたゞ一人、雪踏分けてたどり行く。けいた靴は雪に取られ、着た笠は風に奪はれて、足から流れる血は、吉野山の白雪に點々の紅を彩つた。さてその後鎌倉に召出さ

女性

白拍子の舞

(一)壬生忠岑の歌。

(二)頼朝の臣。建久二年富士裾野に於ける卷狩の時曾我十郎同五郎に殺さる。

れて、義經の行方を申せとの詮議。かつは白拍子の舞を一曲奏でよとの右府の嚴命に立上つた舞の姿。



靜 御 前

ついで、

(一)吉野山峯の

白雪ふみわけて

いりにし人のあとぞこひしき

と、古歌を少しもぢつて義經を慕ふ貞操の心。工藤祐經に鼓(二)

(一)鎌倉囉五郎景
政の末、頼朝
に仕へ、後、頼朝
て敗死す。
(二)頼朝の臣、北
條時政に殺さ
れず。
志奪ふべか
らす

(三)詩人。愛知縣
津島町の人。
明治八年生。

をうたせ梶原景時に銅拍子をうたせ、畠山重忠に笛を吹か
せ、關八州の勇者を眼下に見下した意氣。六十六國を掌の中
に握つた右幕下も、その志ばかりは奪ふことが出来なかつ
た。

雪の朝

野口米次郎

ゆふべは随分雪が降つた。
けさ雨戸をあけると満目の銀世界だ。
庭の樹木のどれを見ても、
積つた雪におしつぶされながら、
心の中ではそれを喜んでゐるやうに見える。

(一)野口米次郎の
詩集。

出入の植木屋が早速やつて来て、
玄關前や庭の廊下まはりの雪を取つて行つた。
私は太陽の光線が廊下にあたる頃、
硝子障子をこぼして
真白な庭をながめるご、
雪が取拂はれた廊下まはりの地面から温い湯氣
が立ち、
よく見ると地面は一夜の中に青く苔をはやし、
小さい雑草もぼつ／＼芽を出してゐる。
雪はかうも温いものかなと思つて、
「いよ／＼春も間近い。」と私は自分でびつくりする
やうな大きな聲を出した。
——最後の舞踊——

二九 櫻花の短刀

騷然
大節
身も世もあらぬ
機密を探る隠れたるよ
り顯るゝはなし

三百年の徳川の流の末濁りて、世の中騷然たりし頃、かよわき婦人の身を以て、男々しくも正義の旗を翻し、勤王の大節を唱へしもの遠近にあらはれたり。松尾多勢子もその一人なりけり。多勢子は信濃國伊那郡の片田舎に住める農夫治右衛門の妻にして、身分賤しきものなりしが、一たび正義の何物たるかを知り、國家を憂へては、身も世もあらぬばかりに思ひつめ、深く勤王の志士と交り、婦人の身の却つて人の油斷もあるべしとて、窃に幕府の機密を探り居たり。げに隠れたるより顯るゝはなしとかや。多勢子が度々の

向と外を歩
めうはれ
ちのはふい

自若

一味の人々

捕吏

(一)政治家。舊長
州萩藩の士。
明治三十三年
歿、年五十八。



松尾多勢子

江戸出府は、遂に幕吏の疑ふところとなり、一日討手の向ひ來らんといふこと聞えぬ。多勢子聞きて少しも驚かず、自若として靜かに鏡に向ひて髪を解けり。一味の人々、一刻も早く立退くべき由を勧めしが、多勢子却りてこれを制していへるやう、事すでにここに至れり。今は捕吏の來るを待ちて、潔く自刃せんのみ。取亂しては耻辱なり。とて、更に衣服を着替へんとするにぞ、人心をいらだつるをりしも、品川彌二郎等駈來りて、強ひてこれを連出し、長州邸にかくまひ、漸く事なきを得たりとい

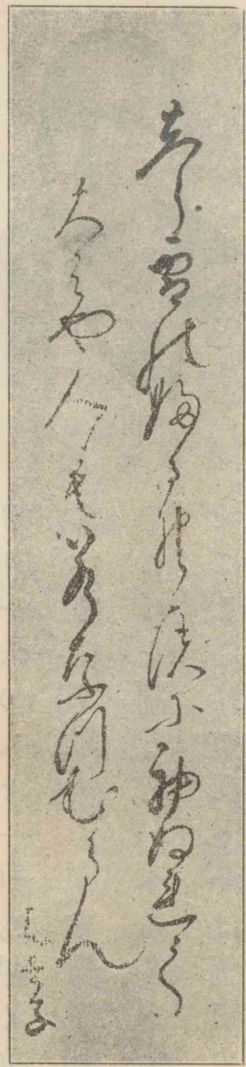
(一) 萩藩主。

隱隠す

白雪のふる
のの澤に袖
ぬれて大宮
人も若菜つ
むらん
多勢子

往生を遂ぐ
雲居の空
(二) 昭憲皇太后。

ふ。毛利敬親公深く多勢子の健げなる志をめでて、櫻花をちりばめたる短刀を賜へりとぞ。
その後郷里に歸りて、なほ脱走の志士を隱隠して、便宜を與へしこと幾回なるを知らず。王政維新の世となりては、我



多勢子筆蹟

が志も遂げたればとて、餘生を東京に送りて、明治二十七年といふに、心安く往生を遂げたり。多勢子病死の事雲居の空までも聞え、畏くも皇后宮より紅白の縮緬を賜ひて、その志

(一) 篤胤の嗣子。
明治十三年
歿。年八十二
言葉の林
途すがら
(二) 近江にあり。

鏡山心
見
イ
ズル

(三) London.
(倫敦)
氣付

を賞せられたりといふ。亡靈いかに感泣したりけん。多勢子は幼き頃より和歌を好み、老いては平田鐵胤の門人となり、言葉の林ふかくわけ入りたりといふ。維新の時、京に上る途すがら、鏡山を過ぎてよめる歌、

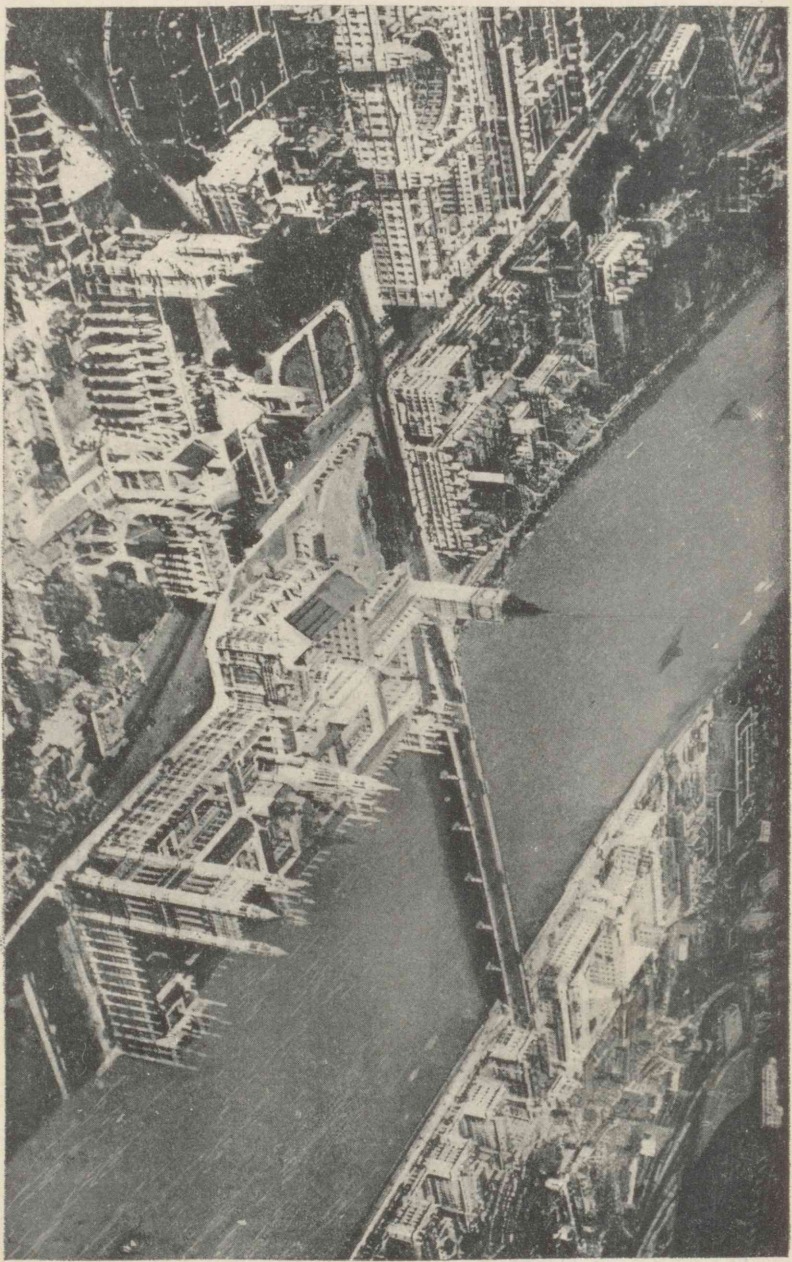
鏡山心(二)のくまも晴れにけり
たちかへる世の面かげを見て。

三〇 ロンドンだより(三)

拜啓。きのふ大使館へ行つて、同館氣付で御差出しの御手紙を受取りました。その後はおかはりもなく御勉強の由、何よりも結構に存じます。私もここに着以來もはや二箇月、諸

處の見物も一通りは済ませました。着いた當座は東も西も分らず、地下を縦横十字字に走つて居る地下電車も不案内で困りましたが、今は自然に覺えて、もうまごつくこともありません。新しく日本から着く人を案内したりなどして、あつぱれロンドン通になつて居ります。たゞ今の住所は市の西の方で有名なハイド・パークといふ大公園の附近の下宿屋です。宿泊人は十人ほどで、イギリス人の外、フランス人、ベルギー人、スウェーデン人なども居つて、食事の時は皆一室に集ります。日本人は外に一名も居らぬので、少し寂しく思ひますが、語學の勉強の爲には、この方が却つてよからうと存じて居ります。日本大使館は四五町隔つて居ります。

Hyde Park



（るた見りよ機行飛）市ンドンロ

俱樂部

(New York
(紐育
(Chicago,
ともに北アメ
リカ合衆國の
都會。

在住日本人の組織して居る日本人會といふ俱樂部があります。これも遠くはありません。目下在住の同胞は大使館領事館の人々が十二三人、陸海軍の將校が併せて二十四五人、私どものやうな留學生が十人、その他は三井、三菱、郵船會社、正金銀行などの人々を始め、商工業に従事してゐる人で、全體では三百人も居りませう。土曜の晩など日本人會へ行けば、なかく賑やかな事です。ここでは日本食も出來ますから、折々行つて、故國の新聞を読み、故國の噂うはせをするのを、何よりの楽しみに致して居ります。

(一) ニューヨークやシカゴ(二)は賑やかな場所も極つて居りますが、ロンドンはさすがに昔からの大都で、どこへ行つても

(1) America
(亞米利加)

(2) Westminster

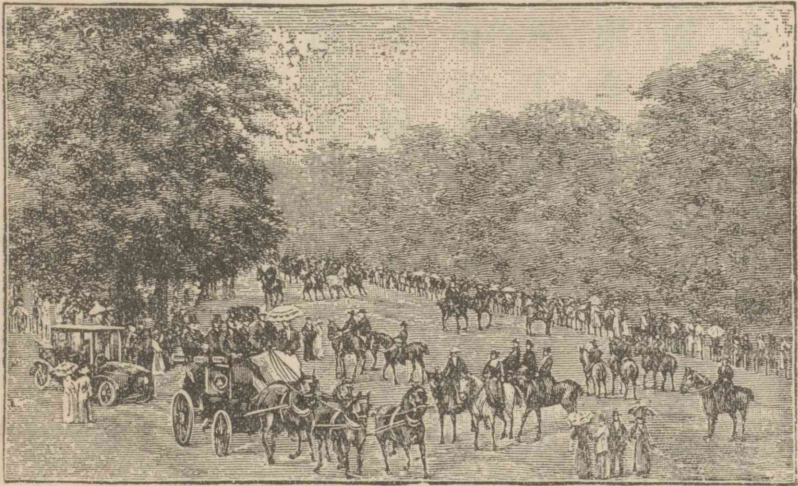
(3) Saint Paul

(4) ロンドン市中
テムズス河の
城邊に在る古

賑やかです。アメリカからこちらへ渡つて見ると、やはり古い文明國の偉大な點がわかります。古い建築物や、古い記念碑や、皆英國の歴史、歐洲の歴史に關係をもつて居るので、見る物として面白い感想を浮ばせないものはありません。(1) ウェストミンスター、セント・ポールの大寺院など、どうしてもアメリカでは見られないものです。(2) ロンドン塔へも行つて見ました。中世時代の武器の陳列が心を惹いたよりも、某王、某侯といふ名高い人々が露と消えた斷首場の跡を見て、思はずぞつとしました。日本國の歴史ほど美しい歴史はないと、つくづく感じました。

大英博物館の陳列品を見ては、英國の發達の歴史、それに

(1) Paris
(田舎)
(2) Louvre



ハ イ ド バ ク

連れて各時代の偉人を思ひ出します。その一部圖書館には、毎日幾百といふ人が大きな讀書室に集つて、靜かにそれぞれの研究を續けて居ります。繪畫館の繪の上には、一硝子がはめてありますので、見にくくて、近眼の私は少し弱りました。(1) パリのループルでは、そんな事はありませんでした。これは氣候か何か

South Kensington.

の關係があるのでせう。南ケンシントンの博物館、ここには理科、博物の標本などが澤山ありますが、最も感心したのは機械の標本で、一つボタンを推せば、電力で動くやうになつて居りますから、どんな精巧な新奇な機械でも、一見してその構造、作用が分るのです。日本にもかういふ博物館が欲しいなど、同行の友人と語り合つたことです。

ロンドンの冬は日が短く、霧が多くて、誠に鬱陶しう御座います。それでもハイド・パークあたりでは、氷滑が盛です。この寒さにもめげず、男も女も戸外の運動に熱心なのは感心です。四月にもなれば、寒氣もだん／＼緩んで、公園の青葉もそろ／＼芽を出すさうで、五月が日本の春の氣候ださうで

めげず

Queen Victoria. (西曆一八一九年—一九〇一年)
 George V. (西曆一千九百十年即位)
 妙齡
 前古未曾有
 太陽の没せざる國土
 誇稱す
 Duchess of Kent.
 皇儲

す。その時分になると、色々の戶外運動が一層盛になるので、す。いづれその中に又々お便を致しませう。皆様によろしく。

三一 女帝ヴィクトリヤ

女帝^(一)ヴィクトリヤは英國現皇帝^(二)ジョージ五世の祖母君にて、十九歳の妙齡より、八十三歳の高年に至るまで六十五年間の久しき、英國に君臨したる明君なり。英國の國運は、女帝の治世間に於て、前古未曾有の發展をなし、領土は東西新古の諸大洲に擴り、英人をして太陽の没せざる國土と誇稱せしむるに至れり。

母なるケン^(三)ト女公は、他日大英國の皇儲たるべき皇女の

慈善市

教育には、少からざる苦心を爲し、が、ヴィクトリヤは幼時より正直にして、慈善の心深く、又常に質素儉約を重んじた。りき。或時の旅行に、「何か欲しからずや。」と母公の間はれし事ありしに、「砂糖氣なきパンの一片を。」と望みたりといふ。又八歳の時とか、慈善市に臨みて、かれこれと人々への土産物を買求めつ、財囊全く空しくなりしが、ふと一人の甥の事を思ひ出し、一つの手箱を得んとせり。管理人はもとより皇女と知れば、直ちにこれを渡さんとせしに、女傳たる某男爵夫人はこれを押しめて、「否とよ。皇女は金子を持合はせ給はねば、又の日にこそ。」とてとどめしに、ヴィクトリヤはおとなしくうなづきぬ。さて次回小遣を與へられし時、再び行きてその

女傳

否とよ

箱を求めたりといふ。これ等の逸話によりて、女帝が性質の



帝女ヤリトクイヴ

おとなしかりしと、母公が教養のおろそかならざりしとを知るべし。後年高價なる腕環を購求せんとせし時、適老士官の寡婦のもとにせらるる歎願書を見らるる如き、幼時の美質は生涯その光をあらはしたりき。

つゆ
首相
點檢

仕事の變化

元首

Albert

女帝は非常に勤勉にして、政務を見るにつゆ厭へる色なし。首相は一日女帝に向ひて、重要な書類の外は、一々點檢して記名し給ふ要なかるべし。と言ひしに、帝は「若し朕が満足せざる書類に記名する事あらんには、それは朕にとりて重大なる事件にあらずや。」といひて、取合ふ様子なかりき。また或時同じ首相の、數多の書類を讀上ぐるに當りて、餘りに多數なる旨を言上せしに、女帝は「朕にとりては仕事の變化あるこそよけれ。朕は懶惰に日を送るを好まず。」といひ、少しも疲れたる氣色なかりきといふ。一國の元首としてのこれ等の語は、我等一學生にとりても、亦最も善き教訓にあらずや。齡二十二にして、ドイツよりアルバート公を皇婿に迎へ、

Friedrich III.
Wilhelm II.

Edward VII.
(西曆千九百
一年即位、同
十年崩)
裔孫の繁榮

人格

馬子にも衣
裳

よく妻としての道を盡し、數多の皇子皇女を擧ぐるに及びて、又よく母としての務を果したり。第一子は皇女にして、ドイツ帝フリードリヒ三世の皇后、即ち前皇帝ウイヘルム二世の母、第二子は皇子にして、英國の皇位を嗣ぎたる先帝エドワード七世なり。その他の皇子、皇女、いづれも王公の家を有ち、裔孫の繁榮いふばかりなし。女帝の如きは、嘗に一國の君主として敬すべく、尊ぶべき人たるのみならず、實に婦人として愛すべく、慕ふべき人格を具へたりと謂ふべし。

三二 行儀作法

諺に「馬子にも衣裳」といへり。しかしいかに立派なる衣裳

不恰好

沐猴にして冠す

を着たりとて、若しその人にして起居ふるまひの賤しからんには、却つて不恰好となるべし。世の中の人々、たゞ綺麗に着飾れば上品になるものと思ふは、大いなる心得違ぞかし。かゝる類を、沐猴にして冠す。」とこそはいふなれ。

○余はこれに就きて、行儀作法の大切なることを見る。行儀作法とは何ぞや。人々の日常の舉動の上に現るゝすべての品格なり。家庭に在る時も、朋友と交る時も、公の場所に臨む時にも、細かにいへば、箸のあげおろし、時候の挨拶、茶を飲むにも、世間話をするにも、行儀作法は包むことも、隠すことも出来ぬものなり。いかに立派なる着物を着たりとも、下品なる行儀作法を打消すことは出来ず。されば行儀作法の心得

は、何人も疎にすべからず。孔子は「性相近し。習へば相遠し。」と曰へり。そは人は習慣によりて、いかやうにもなることをいはれたるものにして、「氏より育ち。」といふ諺も同様の意味ならん。

心すべし
しかつめら
仕打
筋合

されば世の親たる人は、その子供の教育に就きても、よく心すべきことなり。行儀作法とて、必ずしも丁寧に人に辭儀をするのみにあらず。また小笠原流にしかつめらしくするをよしといふにもあらず。たゞ恭敬なる心をば、恭敬なる仕打に現すまでの事なり。言葉遣といひ、様子といひ、何となくおとなしく上品に、自然にして作り飾りなきうちにも、自ら筋合正しきところあるがよきなり。

口論

我が國封建時代には、いかに行儀作法の正しかりしことよ。例へば、口論をなすにすら、殊更に膝を直うし、容を正しうし、言葉靜かに論じたるなり。況や長者に對する幼者の作法の如きは、上下の差別いかに嚴重なりしことよ。余は今日の社會に、かくあれと註文するにあらず。何となれば、封建時代に於ては、餘りに行儀作法をのみ心掛け、その弊や、虚飾に流れたる事なきにあらざればなり。維新以來、風俗の破れたる事も多けれど、行儀作法の崩れたるほど甚だしきものはなし。今や我が國民は世界各國の人と交際す。この時にあたり、從來君子國、禮儀國などと賞讃せられたる國柄にも似合はず、不行儀、不法法にして恬として耻ぢざるは、いかにも心苦

虚飾に流る

恬として耻ぢず

しき次第ならずや。

されど行儀作法をもつて、たゞ外形の修飾のみと思ふは大なる誤なり。いかに進退周旋は禮節に中るとも、若しその心賤しくば、自ら外に現るゝものぞかし。されば行儀作法の要は、まづその心を正しうするにあり。次には上品なる人を手本として、よくその風に化せらるゝやうにするにあり。一家の主婦の如きは、その子供の手本ともなるべき人なれば、別して行儀作法には注意すべきことなり。

自修文

三三三 西洋の家庭

西洋人の客間のさまを見ると、壁に掲げた油繪、机の上の花瓶、

進退周旋
禮節に中る

處せし
意せまきの

祖先から傳はつた器具や名譽の記念物はいふに及ばず、知人の
寫眞や、遠方からの到來物や、皿、鉢までも處せきまてに陳列して
あつて、恰も小博物館の觀を呈して居る。日本の座敷床の間の飾
のあつさりしたのに引換へて、賑はしくはでやかである。窓掛の
總の重げに、絨毯の色の鮮なのは、日本の白い障子と青疊の小ざ
つぱりしたのとは、全くその趣を異にして居る。

西洋では客間と食堂と寢室は皆別々で、食堂も相應に綺麗に
裝飾してある。客を饗應する時にもここに導くのである。

食事の時には合圖の鈴などを鳴らすところもある。朝食はド
イツ、フランスなどでは大抵パンと珈琲で済ますが、英國では冷
たい肉、燻した魚なども食ふ。晝食を重なる食事とする國もあり、夕
食を第一の食事とする國もあるが、英國などでは夕食の卓に着
く時は、同じ家内の者でも、顔を洗ひ、髪を梳り、衣服を改める。食事

くつろぐ
る。ゆくりす

睦び合ふ
ふ。したしみ合
Piano.

經濟
と。まけんやくにし
と。まっするこ

中はうちくつろいで談話するが、少しも禮儀を亂すやうなことは
ない。知人を招待する時も、家内一同と食事を共にする習はし
で、日本のやうに主人だけが客と膳に向ふのではない。招かれる
人も、その家族一同と睦び合ふのを樂みとして來る。食後の談話
時は最も樂しい時間で、その間主婦や娘がピアノを弾ずれば、一
同が歌を歌ひ、又さまざまの室内遊戯をする。

食卓の周旋は主婦たる人の役目で、肉を切つて盛分けて、一同
に分ちなどする。料理も中流の社會では大抵主婦が自らこしら
へるので、しかも一片の肉を色々に使ひ、屑が出れば、その屑で又
別な料理をこしらへるといふ風に、少しも物をむだに使はぬ。家
の經濟をよく立てて行くのが、主婦の主要な任務であることは、
東洋も西洋も古今共に變りはない。

日用の食品などを整へる場合にも、必ず籠を手にして市場に

買ひに行くので、家に坐して魚屋、八百屋の出入を待つて居ることはない。外出にも不斷着のまゝで出掛けることが多い。すべて衣服の類も割合に質素を旨とし、身分不相應な贅澤をすることはいやうである。音楽を聴きながら、子供の守をしながら、又は汽車、電車の中などでも、婦人がたえず編針を動かして毛絲を編んで居るのは、外國に遊んだ人の直ちに目につくことである。男がボタンの落ちた服を着て居れば、妻がいくぢなしのやうにいはれるのは、ちやうど我が國で綻の切れた着物を子供に着せて置くと、母が笑はれるのと同様である。

障子の破を繕ふ世話もなし、シャツや襟などのよごれ物は洗濯屋へやるから、主婦の仕事は日本より少いやうに思はれるが、窓硝子のふき清めや、絨毯の塵拂や、部屋々々の整頓掃除など、日の仕事にもなかく、骨の折れることが多い。しかし食事の時

(Shirt)

に不意の來客もなく、客の來る毎に、一々茶や菓子を出すといふ習慣はないから、その點は樂である。——國定高等小學讀本——

樂しき家庭

旅のやごりのわびしさは、

宮もわら屋も同じここ。

わが家離れていくにか、

心安けく世を經べき。

樂しの我が家、なつかしの

わが家にまさる里はなし。

わが家にまさる里はなし。

富もほまれも何かせん。

樂しき鳥のこゑ聞きて、

心のごけく送りてし

むかしの春よ今いづこ。

樂しの我が家、なつかしの

わが家にまさる里はなし。

わが家にまさる里はなし。

(英國古歌より)

わびしさ
とむしいこ

送りてし
送った。

三四 北國の初春

相馬 御風

六七尺も積つてゐた雪が、いつの間にかすつかり消えてしまつた解けた雪は、解けるあとから、殆ど全く人間に氣附かれずに、或は蒸發し、或は大地に吸ひこまれ、或は流れ去つて、どうしてなくなつたか解らないやうに、すつかりなくなつてしまつた。

幾月かの長い間、深い雪の中に閉ぢこめられてゐた北國の子供等が、久しぶりで黒い大地の面を見出した時に歡ぶ有様は、全く言つて見やうのないものである。まだかなり深く消え残つてゐる雪の所々に、黒く濕つた土がのぞき初め

(一) 感後出雪時の僧。天保中寂す。年六十餘。



高田市の雪景

ると、子供等は言合はせたやうに、次々にそこへ集つて行く。そして殆ど躍り出さんばかりのうれしさで、土を踏廻る。田や畑の所々に見え出した黒土の斑点には、鷗かもや、鴉からすや、雀がまづ群をなして集る。彼等の上にも、生々した歡が輝いて見える。

むらぎもの心たのしも

春の日に鳥のむらがり

あそぶを見れば

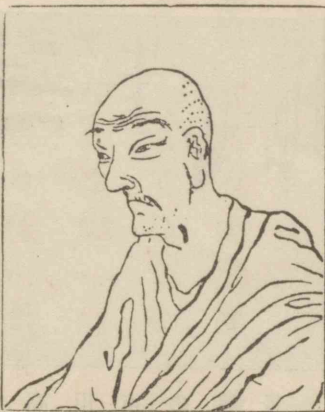
かう良寛(一)が歌つた心持も、特に雪國に住んだ者に、一層深い

やをら

(一) 俳人。信濃柏原の人。二十七年(二四六八)歿。年六十八。

味があるのである。

「長々の月日、雪の下に忍びたる露、蒲公英のたぐひ、やをら春吹く風に時を得て、雪間々々をうれしげに首さしのべ



良寛肖像

て。一茶が書いたやうな若草の歡も、雪國に住む者にして、始めてしみじみと味ははれるのである。大地を踏歩く人の足音の久しく聞えなかつたのを、静かな夜にふつと聞きつけた時の、一種微妙な懐かしみと歡ばしき、そんな心の經驗も、雪國に住めばこそである。

あづさ弓春になり

なば草の庵を

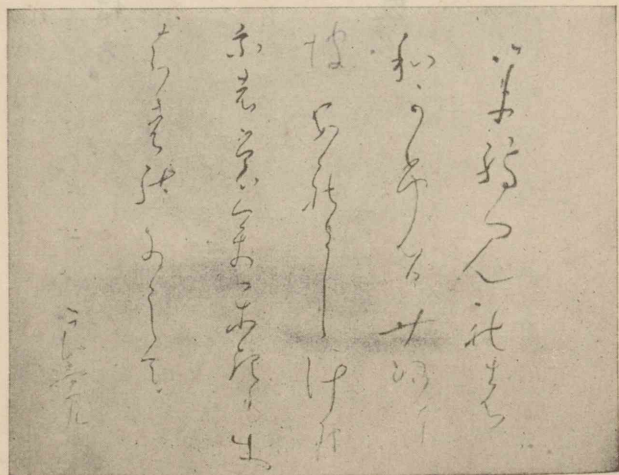
とく訪ひてまし

逢ひたきものを

かういふ良寛の歌も、北國の冬といふことを考へないでは、なかなか理解されないことである。

全く北國の住民の春を待つ

心には、測り知れない深さが窺はれるのである。



良寛筆蹟

— 樹かげ —

三五 世界の春 福田正夫

やはらかく風が、
 輝いた海洋から地上にのぼる。
 光つてゐる畑、
 光つてゐる樹、
 光つてゐる葉、
 一つ々々がみんな春の呼吸。
 緑の春は
 樂しげに搖ぎ、

憂鬱 解放

こめる

よろこばしさに搖ぎ、
 「生きてゐる生きてゐる。」光の中でさゝやく。
 黒い土がその下に燃えながら、
 黙つて光を吸ふ。
 崩えたつ春の碧の空。
 忍んだ冬の寒い憂鬱から、
 南の國の春は解放される。
 枯草の間の小さな草の葉、
 菜の色、大根の色、
 ふか／＼ここめた太陽の愛、

こけるやうなやはらいだ空氣。

いま

路をゆるやかに行く農夫。

その手が光る。

その鍬くわが光る。

輝いた地上の光に、

こけて行く愛の世界の春。

— 日本近代名詩集 —

三六 雛の節供と摘草

徳富蘆花

一 雛の節供



細君

雛 祭

四方を折つたり、あらん限りのかはいいものを集めて、雛壇を飾つた。

三月三日。別わかに買つた雛ひなもないから、細君が鶴子を相手に紙雛を折つたり、色紙の鶴、香箱、三方

草餅が出来た。蓬はきのふ鶴子が夏やとたんぼに行つて摘んだのである。東京の草餅は、染料を使ふから色は美しいが、肝腎の香が薄い。

けさは非常の霜だつた。午の前後は又むやみと暖で、急に梅が咲き、雪柳が青く芽をふいた。山菜萵は黄色の花ざかり。赤い蕾の沈丁花も一つ白い口を切つた。春蘭、水仙の蕾が出て来た。

かげろふ

雲雀が頻りに鳴く。麥畑に陽炎が立つ。

啞の巳代吉が裸馬に乗つて来た。女子供がきやつく騒ぎながら、麥畑の向ふを通る。若い者が大勢大師様へ参詣に出かける。

(一)武蔵國川崎町にある大師堂

春だ。

二 摘草

三月八日。けふも雲雀が頻りに鳴く。

午食前に夫妻、鶴子、ピンを連れてたんぼに摘草に出た。田の畔の猫柳が絹毛の被衣を脱いで、黄色い花になつた。路傍の草木瓜の蕾が朱にふくれた。花はとにかく、吾等の附近は自然の食物には極めて貧しい處である。芹少々、嫁菜少々、蒲公英少々、野蒜少々、露の臺がたゞ三つ四つ。穫物はこれつきりであつた。

午後書を讀んで居ると、空中に大きなものうなり聲が響く。縁から見上げると、夏に見るやうな白銅色の卷雲を背

被衣

にして、南の空に赤い大紙鳶が一つあがつて居る。ぶら下げた長い長い二本の繩の脚を、軟に空中に波うたして、紙鳶は心長閑に虚空の海に立泳をして居る。ふうんといふうなりが、武藏野一ぱいに響き渡る。 —み、ずのたはこと—

自修文

三七 犬ころ

(一) 二葉亭四迷

うれしいにつけ、悲しいにつけ、憶ひ出すのはポチの事だ。春雨のしとくと降り降る薄ら寒い或夜のことであつた。私は例の通り宵の口から寝てしまつたが、ふと目をさますと、耳元近くに妙な音がする。ごうといふかすとすればすうと、或は高く、或は低く、單調ながら拍子を取つて、さながら、大鋸で大丸太を挽割るやうな音だ。私は夜中にめつたに目を覺したことがないから、初はびつ

(一)小説家。本名助は長谷川辰之助。迷はその號。創始者。小説の年四十二年。四十六。

單調 變化のない調子
大鋸 おほのこぎり
む おほのこぎり

囃子 鳴物で調子をとること
合の手 歌と状の間にひく音曲
氣壓 さるおいきほひにおされる。

けたたましく
とんきやう
めいる
しづかむ。

りしたが、よく研究して見ると、なに父の躰なので、やつと安心して、そのまゝ再び眠らうとしたが、どうもこれが耳について寝附かれない。仕方がないから、聞えるまゝにその音に聽入つてゐると、いつからとなく囃子の手がこんで来て、合の手に、遠くでかすかにきやん／＼といふやうな音が聞える。躰が凄じい時には、それに氣壓されて聞えぬが、躰が低くなると、はつきりと手に取るやうに聞える。不思議に思つて益、耳を澄ましてゐると、次第に大きく高くなつて、遂には躰と離れ／＼に、確かに門前に聞える。かうなつて見ると、疑もなく小犬の啼聲だ。時々喉でも締められるやうにけたたましく、きやん／＼と啼立てる。その聲尻がやがて段々に細く悲しげになつて、めいるやうに遠い／＼處へ消えて行く。かすとすれば、忽ち又近くで堪へきれぬやうに啼出して、くん／＼と鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするや

うな時もある。

私はそつと夜着のなかから首を出して、「小さい犬の聲だねえ。どうしたんでせう。」とうるさく母に聞くと、母は優しく、「どこかの人^{ひと}が棄てた犬だらう。」と、一々説明してくれて、「もう晩いから黙つてお寝。」とあちらを向いてしまった。

私も亦夜着をかぶつた。犬は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつれて、父の躰が又うるさく耳に附く。寢られぬまゝに、私は夜着のなかで棄犬の有様を繰返し繰返し考へた。まづどこかの飼犬が、縁の下で兒を生んだとする。ちつぽけなむく／＼したのが重り合つて、首をもたげて乳房を探してゐるところへ、親犬が餘所^{よそ}から歸つて来て、その側へどさりと横になり、片端から抱へこんでなめると、小さいから、舌の先でたわいもなくころ／＼と轉がされる。轉がされては大騒して起返り、又よち／＼とはつ

お腹もくち
くなる
満腹になる。

て、ぼつちりと黒い鼻づらで、お腹を探り廻り、漸く思ふ柔な乳首を探り當て、あわてて吸附いて、小さな両手で揉立て／＼吸出すと、甘い温な乳汁^{ちぢ}が出て来て、喉へ流れこみ、胸を下つて、何ともいへずおいしいと、腋^{わき}の下から、まだ乳首にあり附かぬ兄弟が、鼻づらで割りこんで来る。取られまいとして、産毛^{うぶげ}の生えた腕^{うで}を突張り、大騒をやつてみるが、とう／＼取られてしまひ、又そこらを尋ねて他の乳首に吸附く。そのうちにお腹もくちくなり、親の肌で身體も温つて、とろけさうな好い心持になり、ついうと／＼となると、含んだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわてて又吸附いて、一しきり吸立てるが、ぢきに又たわいなくうと／＼となつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けるも知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體^{ちやうたい}がない。その時忽ち暗闇^{くらやみ}から大きな腕^{うで}がぬつと出て、正體なく寢入つてゐるところをむづとつかみ、

いたいけな
う。幼くはいさ

足搔
足の運動。

濡れしよば
たれる
びしよぬれに
なる。

途方にくれ
る
どうしようか
と方法にまよ
ふ。

宙につるす。驚いて目をばつちりあけ、いたいけな聲で悲鳴を揚
げながら、四足を張つてもがく中に、頭から何かで包まれたやう
で眞暗になる。窮屈で息が塞がりさうだから、出ようとするが、出
られない。暫くもがいて居る中に、ふと足搔が自由になると、領元
をつままれて、高い／＼處からどさりと落された。うろ／＼とし
てそこらを視まはすけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で、誰も
居ない。ぼんやりとしてゐると、雨に打たれて、見る間に濡れしよ
ぼたれ、おそろしく寒くなる。身慄一つして、く／＼と親を呼ん
で見るが、どこからも出ては來ない。途方にくれて、よち／＼とは
ひ出し、夜中にたゞひとり、温な親の乳房を慕つて、悲しげに啼廻
る聲が、さつき一度門前へ來て、又どこへかさまよつて行つたや
うだつたが、それがいつか又戻つて來て、どこをどうもぐりこん
だのか、今は啼聲が正しく立關先に聞える。

うんざりす
る
よわり切る。

(一)全四巻。東京
朝日新聞社發
行。

私はたまらなくなつて、母に頼んで、この小犬に食物を與へて、
一晚泊めてやることにした。犬嫌の父は、泊めたその夜を啼きあ
かされると、うんざりしてしまつて、あくる日は是非追出すとい
ひ出したから、私は小犬を抱いて逃げまはつて、どうしても放さ
なかつた。父は困つた顔をしてゐたが、しかしそれも一時のこと
で、その中に小犬も獨寢に慣れて、夜も啼かなくなる。追出す筈の
ものについてしかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと、父まで
が一緒に捜すやうになつてしまつた。

—二葉亭全集—

三八 月雪花

春はハナミ、夏はスズミ、秋はツキミ、冬はユキミ。夏のミだ
けが、月雪花三つの眺に關係はないが、夏の月夜の涼は又格

雅興
童謠
風流

歴史的懷舊

徑庭

詩的教育

別に快い。春の花見は昔の大宮人にも、今の丁稚小僧にも、一年間の最大歡樂である。芋、栗を捧げて秋の月を祭る風俗は、同じく一般國民的の雅興である。お月様いくつ。の俚歌、雪よふれく。の童謠、月雪花の風流は子供の時から教へられて、我等の頭にしみこんで居るのである。

月雪花を見て感ずるのは、歴史的懷舊の念が添ふからである。我が國の櫻花は唐人も高麗人も美しいといふに違ないが、彼等の感ずるところと我が國民の感ずるところには、大きな徑庭がある。西洋人は觀月といふことに關しては、殆ど何の興味をももつて居らぬ。我等は子供の時から月雪花で教育せられた。月雪花を弄ぶといふ詩的教育を受けて來

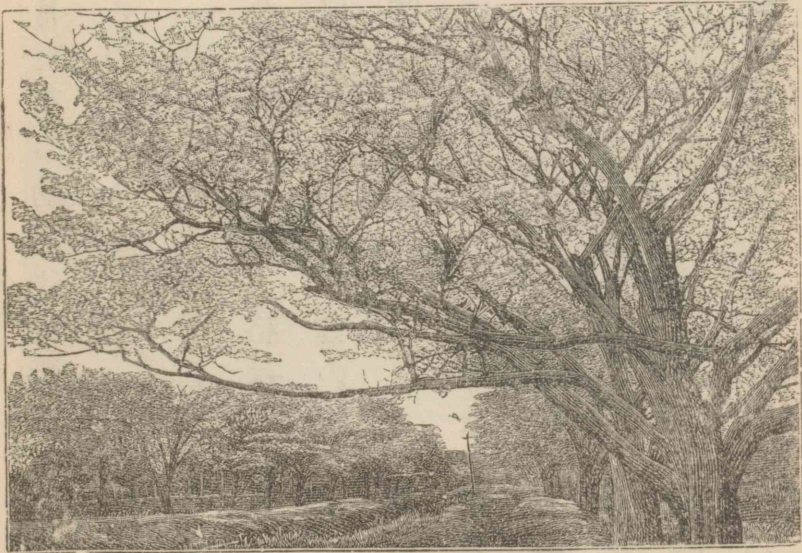
塵世

隱遁

皎々

皚々

利慾に營々
たり



花 (小金の井のほひ)

たのである。

風流の眞義は塵世を忘れることである。全く塵世を忘れて活動社會を離れることは隱遁者の所行であるが、少くとも皎々たる明月、皚々たる白雪、雲の如く霞の如き花に對して、これを眺めて居る間は、いかなる人も利慾に營々たる實社會を忘れるのである。

月雪花の効用は美術と同じく、人を高尚にし、人を温雅にするのである。

我等日本人は月雪花を大いに觀賞して、これを人事と結合した。高尚な人格はこれを月雪花に譬へる。月に叢雲、花に風。月の入るのや、雪の消えるのや、花の散るのは、これを人の蹉跌や死去に譬へる。さうして繁榮、隆昌、幸福は月雪花の美に比較した。古來の吟詠はすべてこの譬喩法を用ひて居る。我等は月雪花を尊敬し、月雪花に種々の美德を附加する。無情の物を有情化した上、更にこれを有徳化するのである。月は公平無私、寸毫も汚のないものとして、光風霽月などと熟語せられて、君子人の赤心に比べられる。月を蔽ふ雲はそ

蹉跌

吟詠
譬喩

有情化
有徳化

光風霽月

君子人

邪佞

なぞらふ

氷潔

嚴肅



雪の京都御所

の光明を掩ふものとして、小人邪佞の徒になぞらへられる。又雪は氷潔一點の塵のないことから、冷たい嚴肅なところを見て、潔白な精神や節操の動かないことを連想する。花は爛漫たる美しさの、忽ち風に散行くのを惜しんで、節義の士が身命を抛つのに譬へる。月や、雪や、花やに靈があつて、これ等の徳を備へて居るやうに感ずるのである。古人がかく感じ來つた

(一) 堀氏。武藏の
人の群書類の
四年編者。文政
十一年。歿。二
十六。年。七

(二) 紫宸殿のこと。

そのまゝを我等は承繼いで、我等もさう感ずるのである。
月雪花を觀賞し得る吾等は幸福である。盲人の學者保己
一の逸事として傳はつて居る話に、或時月明に對して、

花ならば探りても見んけふの月

といった。又京都に上つた時、御所の南殿(なご)の櫻(ざくら)の花盛と聞い
て、

目に見ねばせめてなでんの櫻かな

と戯れた。東海道で富士の山下を過ぎる時には、

言の葉の及ばぬ身には目に見ぬも

なか／＼よしや雪のふじのね

といった。

民族
傳説
品性
國民性
鬚髯
肉眼
心眼

月雪花の眺を恣にすることの出来ない民族は不幸であ
る。月雪花があつても、これに附加せられた傳説を有しない
民族も亦人生の興味に乏しい。我等は月雪花に對して、古來
の文學を味はひ、國家を憶ひ、品性を養ひ、國民性を知ること
が出来、月雪花を通じて、我が國民の歴史は鬚髯として眼
前に浮ぶのである。保己一は肉眼を以ての月雪花は見なか
つたが、心眼を以ての月雪花は眺め得たのである。

女子新國文 卷二 一終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本
書には主として通用字を用ひたり。)

劍	剪	刃	函	減	涼	準	况	決	冒	兔	免	佞	仍	兩	通用		
劍	剪	刃	函	減	涼	準	况	決	冒	兔	免	佞	仍	兩	正		
冤	墻	塚	塲	噴	噐	唇	叙	収	厨	卿	鄉	即	効	通用			
冤	墻	塚	塲	噴	噐	唇	叙	収	厨	卿	鄉	即	効	正			
拔	拏	戲	懺	懃	慨	恒	往	稟	屏	并	帽	尅	寶	寇	通用		
拔	拏	戲	懺	懃	慨	恆	往	稟	屏	并	帽	尅	寶	寇	正		
濱	温	水	殲	欸	概	桿	晋	昂	既	整	攜	攢	擯	插	通用		
濱	温	冰	殲	欸	概	杆	晋	昂	既	整	攜	攢	擯	插	正		
盃	鼓	痴	畧	留	畫	瑣	玄	猫	猪	猿	熔	陰	潜	濶	通用		
杯	鼓	癡	略	畱	畫	瑣	玄	貓	豬	猿	鎔	陰	潛	闊	正		
織	績	績	紀	穀	粘	籤	纂	節	竝	竊	秘	頤	穎	研	通用		
織	績	績	紀	穀	黏	籤	纂	節	竝	竊	祕	頤	穎	研	正		
厠	勅	冲	徇	俟	京	亡	並	万	脉	聳	耻	羹	群	罰	纏	通用	
廁	敕	冲	徇	埃	京	亾	並	萬	脈	聳	恥	羹	羣	罰	纏	正	
婚	姉	妍	妊	野	坂	嚙	叶	厮	同	莽	艷	館	舖	阜	致	腸	通用
婚	姉	妍	妊	埜	阪	齧	協	厮	字	莽	艷	館	舖	阜	致	腸	正
考	慙	富	忘	庵	嶋	峯	峩	岳	表	記	解	霸	褒	衛	蔭	萌	通用
攷	慚	富	忘	菴	島	峰	岷	嶽	表	記	解	霸	褒	衛	蔭	萌	正
概	槁	楫	棕	碁	案	柿	村	普	表	軟	賈	贊	賓	象	讎	讖	通用
槩	槁	楫	棕	碁	案	柿	村	普	表	軟	賈	贊	賓	象	讎	讖	正
砧	睹	狸	貉	無	烟	汗	毘	朴	表	馱	隸	隙	間	鎖	隣	輒	通用
砧	睹	狸	貉	无	煙	汚	毗	樸	表	馱	隸	隙	間	鎖	鄰	輒	正
縹	縵	網	紅	糾	粽	筍	競	稿	表								通用
縹	縵	網	紅	糾	糉	筍	競	藁	表								正

附
錄

羈 驕 羈
 船 船 船
 輜 輜 輜
 花 華 衽
 荒 荒 衽
 虱 譁 譁
 蹤 蹤 蹤
 鏤 鏤 鏤
 鏞 鏞 鏞
 駟 駟 駟
 驅 驅 驅

本來、異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。
 *標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ

互 互
 桓ニ同シ。
 ワタル。「連互」

體 體
 笨ニ同シ。アラシ、龜、粗。
 カラダ。

但 但
 タマシ、タマ。「但馬」
 ツタナシ、拙劣。

僭 僭
 ミダリガハシ、猥。
 自分ヲ越エテオゴル。「僭越」

胃 胃
 カプト、兜。「甲胃」
 ヨツギ、嫡子。又子孫。「胃裔」

協 協
 カナフ、叶。
 オビヤカス、脅。
 サス。「刺殺。刺客。名刺」
 モトル、ソムク、垂展。「亞刺比亞」

臺 臺
 星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
 ウテナ、歹イ

後 後
 ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オグル。
 キミ。「皇后」

商 商
 アキナヒ。
 モト、本。

壺 壺
 ツボ。
 ミチ、宮中ノミチ。

姫 姫
 ツ、シム。
 ヒメ。

蟲 蟲
 魚介類ノ總稱。又マムシ。
 ムシ。

詫 詫
 ヲビ、ヲブ。「詫状」
 詫ニ同シ。アザムク。

詔 詔
 ヘツラフ。
 ウタガフ、疑。

證 證
 アカシ、シルシ。「證明」
 イサム、諫。

豐 豐
 禮ノ古字。
 ユダカ。

迄 迄
 マデ。
 ユク、行。

撰 撰
 エラブ。(ヨリトル)
 エラブ。(書物ヲ編纂ス)

託 託
 拓ニ同シ。オス、ヒラク。
 ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。

擔 擔
 ハラフ。又アゲ。
 ニナフ、カツグ。

改 改
 鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
 アラタム。

鎗 鎗
 ヤリ。
 鏞ニ同シ。鐘ノ聲ノ形容。

糸 糸
 アクビ。「欠伸」
 カク。「缺席」

羨 羨
 ホソイト、細絲。
 イト。

羨 羨
 支那ノ地名。
 ウラヤム。

卻^{キヤク} ^{キヤク}シマ、隙
 シリシク。「退卻」
 鍛^{カシ} ^{カシ}キタフ。「鍛鍊」
 シコロ、「鍛」

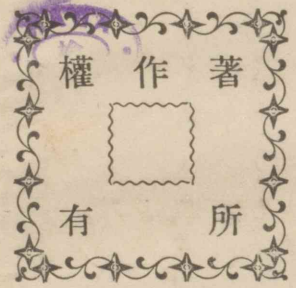
宛字 (左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

おぼつかなし 覺束なし
 かひ(詮の意
の場合) 甲斐
 きつと 屹度
 さすが 流石、遺
 しまふ 仕舞ふ
 せつかく 折角
 だけ 丈
 だめ 駄目
 ちやうど 丁度
 ちよつと 一寸、鳥渡

附 録 終

てたらめ 出鱈目
 とうく 到頭
 とかく 兎角、左右
 とて、とても 迎
 とにかく 兎に角
 なかく 中々、却々
 ふるまひ 振舞
 はかなし 果敢なし
 ほんたう 本當
 むだ 無駄
 むづかし 六ヶし
 やたら 矢鱈
 やはり 矢張

大正十二年十二月十日印
 大正十二年十二月十三日發
 大正十二年十二月十二日訂正再版印刷
 大正十二年十二月十五日訂正再版發行



女子新國文典附

定 價	
自卷一 至卷四 各金四拾貳錢	昭 和 二 年 時 定 價
自卷五 至卷八 各金四拾錢	自卷一 至卷四 各金七拾壹錢
	自卷五 至卷八 各金六拾八錢

著 者 芳 賀 矢 一
 東京市神田區通神保町九番地
 印 發 行 者 兼 合 資 會 社 富 山 房
 合 資 會 社 富 山 房 社 長
 代 表 者 坂 本 嘉 治 馬
 東京市小石川區音羽町二丁目六番地

富山房印刷所

發 行 所

東京市神田區
通神保町九番地

合 資 會 社 富 山 房

山 房

電話神田二四二、二四三、二四四番
 振替口座東京五〇一番

広島大学図書

2000302219

